View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Konan University Repository

KONAN UNIVERSITY

小幡篤次郎 その思想と活動 ： 交詢社設立までを中心に

著者	西澤 直子
雑誌名	甲南法学
巻	57
号	3・4
ページ	133-198
発行年	2017-03-30
URL	http://doi.org/10.14990/00002267

《論　説》

小幡篤次郎　その思想と活動

―交詢社設立までを中心に―

西　澤　直　子

はじめに

北澤楽天に「福澤先生若き日本に西洋文明を教ふ」と題した漫画がある。椅子に座った短髪洋服姿の福澤諭吉が、指を差しながら若い武士に何かを諭している。武士は文字通り目をまるくして、「civilization 文明開化」と書かれた紙を見つめている。(1)

福澤諭吉は封建体制の崩壊後、訪れた新しい時代に、人びとは何を求めいかに行動すべきかについて、明確な指針を示し続けた。その内容については、主張の一貫性の有無を含め、今日でもなお評価が分かれるが、智徳による文明の進歩にゆるぎない信頼を持ち続けたことは、彼の言説から窺うことができる。そして多くの人びとが、彼が示した社会像に期待を寄せた。一編およそ二〇万部、累計三四〇万部という『学問のすゝめ』の出版部数が、そのことを物語っていよう。(2)

しかし多くの読者を得たからといって、すぐに彼の説く社会像が人びとの間に理解されていったわけではない。継続する日常生活の中で、変化を自覚的に受容していくことは、容易なことではなかったと推測される。福澤に「civilization 文明開化」を説かれた若き武士たちはいかにしてそれを受け入れ、また知識階層としていかなる役割を担っていったのであろうか。

本稿では、福澤のごく初期の入門生であり、かつ生涯にわたって彼の活動を補佐し続けた小幡篤次郎を取り上げ、彼の思想と行動を考察する。小幡は第一章で述べるように、同時代人から、彼なくしては福澤や慶應義塾の業績はありえないとまで評価されていたにも関わらず、選集や全集はおろか、伝記も編まれていない。そのため、彼の業績はこれまで充分に検討されることがなかった。しかし福澤の業績をみるうえでも、また前述の観点からも彼の言説や行動を考察することは重要であると考える。

福澤同様彼の活動も多岐にわたるため、本稿で生涯を網羅的に論ずることはむずかしい。本稿では、交詢社設立までを一区切りとして、明治一三（一八八〇）年ごろまでを対象とする。まず第一章で、略歴と先行研究に触れたうえで、第二章では、当該期の小幡の主な業績として、塾長時代の役割、中津市学校や三田演説会との関わり、交詢社幹事としての活動、および著訳書、雑誌論説などの言論活動を取り上げる。その上で第三章において、彼の思想と活動の意図について考察したい。

第一章　略歴と先行研究

小幡篤次郎の伝記は、「大正十五年十一月「読書週間」記念」として中津の小幡記念図書館から出された、わずか五丁の『小幡篤次郎先生小伝　並小幡記念図書館沿革概要』と、縁戚関係にある歯科医師小幡英之助の伝記

『小幡英之助先生』に、系図とともに記載されている程度のものがあるにすぎない。[3] この二つの資料に『慶應義塾五十年史』（慶應義塾、一九〇七年）、石河幹明著『福澤諭吉伝』（全四巻　岩波書店、一九三二年）、『慶應義塾歴代役職者一覧（増補版）』（慶應義塾塾監局塾史資料室、一九八〇年）、『福澤諭吉書簡集』（全九巻、岩波書店、二〇〇一～二〇〇三年）から情報を加えると、彼の略歴は以下のようなものになる。[4]

小幡篤次郎は天保一三（一八四二）年、福澤諭吉と同じ豊前中津藩士の子として生まれた。福澤より八歳年下で、一三石二人扶持で供小姓という下士階級の福澤家に対し、小幡家は二〇〇石取供番の上士階級であった。ただ父篤蔵は、長男である篤次郎の誕生前に、縁辺事件と呼ばれる藩内の政争に巻き込まれ、隠居を命ぜられてしまった。[5] そのため、服部家より養子をとることになり、篤次郎は長子として生まれながらも、家督を相続することができなかった。

幼少時に父から四書五経を習い、のち藩儒野本白巌や藩士古宇田姑山について、漢学を学んだ。野本が宇佐に隠居して塾を開くと、小幡も同行して学んだといわれるが、一五歳のころに中津に戻り、藩校進脩館に入った。安政四（一八五七）年に「句読塾頭」となり、万延元（一八六〇）年には「館務」を命ぜられ、元治元（一八六四）年には「教頭」になった。

ちょうどそのころ、遣欧使節団の随行員としてヨーロッパを見聞して帰国した福澤は、「富国強兵」には洋学による人材育成こそが急務であると考え、彼が預かっていた中津藩の塾を本格的な学塾にしようと考えた。[6] そこで元治元年三月、母に会うために中津に帰省した際に、知人たちに優秀で堅実な青年を、補佐役として江戸に連れて行きたいと相談した。そのときに白羽の矢が立ったのが、小幡篤次郎であった。福澤の誘いに対して当初小幡は、すでに漢学を教える側になっており、今更洋学を学び始めることに抵抗があり、またすでに父が他界してい

たので、母を残して上京することもできないと考えていた。『慶應義塾五十年史』によれば、福澤と会うことがないよう避けていたが、伯母の家で会ってしまい、福澤は家督を相続できない立場の小幡に対して「江戸にて書生の餓死せるを聴かず」と言って説得したという。(7)

結局弟甚三郎とともに上京した小幡は、英語の習得に励み、短期間で著しい成長をとげ、慶応二（一八六六）年には幕府開成所の「英学教授手伝」（一〇人扶持金五両）に就任するまでになった。(8) 弟も同時に「同手伝並」（五人扶持金二両）に任じられている。開成所勤務は「試験を受けて合格したる次第」で、開成所における教師採用試験はこのときが初めてであった。開成所での二人は、生徒の質問に丁寧に答えるだけでなく、その解釈が明確で、兄弟の前には質問者が列をなし、他の教授に気の毒なくらいであったという。(9) またこの年、篤次郎は慶應義塾塾長に就任し、明治元（一八六八）年まで務めた。

明治四年には、中津市学校創設に尽力し、初代校長に就任、五年六月まで務めている。さらに九年に東京師範学校（のち高等師範学校）中学師範科設立の際には、校務をとった。一〇年には、弟甚三郎の墓参も兼てアメリカ、ヨーロッパを歴訪。一二年になると、東京学士会院会員に選ばれ（一四年辞任）、また福澤とともに新たな組織づくりに着手し、翌一三年交詢社が設立されると、幹事に就任した。

明治一五年三月福澤は『時事新報』を創刊し、創刊号の「本紙発兌之趣旨」には、論説に関しては福澤と小幡で立案し校閲すると書かれている。二二年八月には、病気療養中の塾長小泉信吉の代理となり、翌年三月大学部を創設するにあたって推され、再び慶應義塾塾長となった。前回と異なり明治一四年慶應義塾仮憲法制定以後の塾長は、文字通り学事面でも経営面でも、慶應義塾を束ねる長であった。その後三〇年八月に塾長を辞し、翌年四月慶應義塾副社頭に就任、三四年二月の福澤死去後、一〇月には慶應義塾社頭となった。

また学外においては、二三年貴族院議員となり、三二年には貨幣制度調査会委員として貨幣法改正に尽力し、褒賞を受けている。明治生命保険会社創設に際しては、発起人のひとりとなり（明治一四年）、墨水抄紙会社設立に当っても、株主のひとりとして出願している（明治二一年）。明治三八（一九〇五）年に胃癌が判明、四月一六日に死去し、広尾祥雲寺に葬られた。戒名は箕田庵寅直誠夫居士（箕田は号）である。

小幡は、著訳書のほか、『郵便報知新聞』や『民間雑誌』、『時事新報』等に論説を発表し、三田演説会や交詢社、卒業生の会合などでの演説も多い。また百を超える数の書簡も残されている。貴族院議員をはじめ、慶應義塾外での活動もある。それにも関わらずなぜ伝記や全集などが編纂されて来なかったのであろうか。

住田孝太郎氏は「小幡篤次郎の思想像—同時代評価を手がかりに—」『近代日本研究』二一（二〇〇五年）のなかで、彼に対する以下のような同時代人の評価を取り上げている。

福澤君ガ茲ニ慶應義塾ヲ設クルモ皆是レ小幡君ガ相助クル所ノモノアルニヨリ終ニ其盛力ヲ得ルニ至レリ。其西書ヲ翻訳スルヤ必ラズ小幡君ノ校正雌黄ヲ経ルニアラアザレバ決シテ上梓スルノコトヲナサズト。是レ蓋シ学力ノ福澤君ニ出ツルコト一等ヲ加フルガ故ナリト。其文章ノ如キ原ト漢籍ノ資アルガ故ニ福澤君モ常ニ一歩ヲ君ニ譲レリト云ヘリ

（津田権平編『新聞投書家列伝』明治一四年六月）

温乎として春日の如く、霞然として春風の如く、之を窺へば、珠の嚢中より微に光を洩らすが如く、魚の淵底より陰々として頭を動かすが如し。要するに粗朴なる外皮を以て、霊妙なる徳量を包蔵せり。……慶應義塾あることを知るもの、必ず小幡篤次郎君あることを知り。福澤翁の名を知るもの、誰か君の名を記せざらん

（明治二三年三月五日付朝野新聞）

慶應義塾といへば、先づ福澤先生を連想し、福澤先生の名をいへば、又必らず小幡翁を連想せざるを得ず……

内に在りて其の校風を維持し、補養し、且つ進暢せしめたる功の大半は、之れを小幡翁に帰するの至当なるを覚ゆ

（鳥谷部春汀『人物月旦』明治三八年五月）

前述のように、彼らは小幡の学識と功績を高く評価する。しかしそれらが、福澤や慶應義塾が存在しての業績であることは否めない。そして津田らは同時に「惜シムベシ其才幹ノ一点ニ至ツテハ迚モ福澤君ト并ヒ馳スルコトアタヤザルガ故ニ進退左右ノ指揮ヲ受ケザルヲ得ズ」（前掲津田）「人を吸収するの磁石力なく、世を指導するの先見を有せざりし」（前掲鳥谷部）と、小幡が人の前に立ち先導するタイプではなかったことも告げている。[10] その結果小幡の業績は、福澤の業績を補完するものとして位置付けられる、あるいは福澤の業績に一体化してしまったといえよう。

また小幡は「徳」の人であった。社会主義者の堺利彦は「小幡は福澤門の君子にして、福澤の名代として貴族院議員に推薦せられたる人なり。彼はその先師の重任と後輩の重望とに対し、何の職につくといえども、必ずこれをはずかしめざるべきなり」（一九〇三年六月二三日付『万朝報』）と常に物事に対し真摯的であったことを記し、矢野文雄は交詢社創立五〇年記念祝賀会で「小幡篤次郎氏の如き人格者は無いと思ひます。小幡氏は誠に盛徳の士でありました」と述べている。[11] 彼がそうした徳の人であったことも、自らを喧伝することは好まず、むしろ彼の評価を実態から遠ざけたのかもしれない。

慶應義塾福澤研究センターが刊行する『近代日本研究』二一（二〇〇五年）は、「小幡篤次郎没後百年」を特集し、前掲住田論文および舩木恵子氏による「小幡篤次郎とJ・S・ミルの『宗教三論』」を掲載し、また住田氏による「小幡篤次郎著作目録」、拙稿「中津出身者宛小幡篤次郎書簡」「小幡篤次郎略年譜」を収録した。他の先行研究としては、進藤咲子氏が彼の『英氏経済書』の翻訳に関して解説し、村上幸子氏が『議事必携』を、池田幸

弘氏が『生産道案内』を取り上げている。また主にトクヴィルからの訳出を中心に、分権論との関係から論じた松田宏一郎氏の業績がある。[12]

『宗教三論』については、舩木氏のほか小泉仰氏（『福澤諭吉の宗教観』慶應義塾大学出版会、二〇〇二年）および大久保正健氏（『宗教をめぐる三つのエッセイ』勁草書房、二〇一一年）が論じ、また『民間雑誌』掲載の論説「内地旅行ノ駁議」に関する丸山真男氏、平石直昭氏の評価がある。これらについては、詳しくは後述する。

最後に小幡に関する拙稿は、以下の通りである。

「小幡篤次郎考Ⅰ　―書簡にみられる中津士族社会との関わり―」『近代日本研究』一七（二〇〇一年）

「小幡篤次郎考Ⅱ　―慶應義塾教職員として―」『近代日本研究』一八（二〇〇二年）

「小幡篤次郎考Ⅲ　―「女工場の開業を祝するの文」をめぐって―」『近代日本研究』一九（二〇〇三年）

「近代化における小幡篤次郎の役割」池田幸弘・小室正紀編著『近代日本と経済学　慶應義塾の経済学者たち』（慶應義塾大学出版会、二〇一五年）

第二章　交詢社設立ごろまでの業績

一、慶應義塾塾長時代

小幡篤次郎が最初に塾長になったのは、前述のように慶応二（一八六六）年から明治元（一八六八）年の間である。この時期の塾長は、明治一四年以降とは異なり、学生の取り纏め役というような存在であった。当時多くの教員は、講義をもちながらも一方では学び、学校事務もこなしていた。明治元年一一月に入塾した永田健助は、塾長の小幡が福澤の講義に一週間に二回ずつ出席しながら、「日日講義輪講を受持ち、なか〳〵勉強せられた」こ

とを回想している。[13] また慶応元年六月に入塾した立田革や、同二年五月に入塾した馬場辰猪、明治二年九月入塾の須田辰次郎等は、入塾希望者の応接や寄宿舎の監督業務に小幡が当たっていたと述べている。[14]

小幡が行なっていた講義は、『芝新銭座慶應義塾之記』の日課表によれば、慶応四年七月時には「クアツケンボス氏　合衆国歴史講義」「コルネル氏ハイスクール　地理書素読」、明治二年八月には「ウエーランド氏　経済書会読」「クワツケンボス氏　合衆国歴史講義」「歴史並究理書素読及講義」であった。[15] 前述須田の「義塾懐旧談」では、小幡は「(明治七、八年ごろには) 仏人トークビル氏著英訳デモクラシーヲブアメリカ」を講義していたとあり、明治七年四月入塾の鎌田栄吉は小幡の「スリー・エッセイズ・オブ・レリジョン」の講義を聞いたと回想している。[16] 後述するが、小幡はウェーランド『経済書』、トクヴィル『アメリカの民主主義』、ミル『宗教三論』を訳出出版しており、慶應義塾での講義をもとに著訳書を完成させ、また出版した本に基づき講義を行っていたと考えられる。

『慶應義塾五十年史』掲載の教員リストをみると、「新銭座時代の教員」(慶応四年一月以降) および「三田の初期に於ける教員」(明治四年三月以降) には小幡の名前があるものの、「明治十五六年より同二十年頃迄の教職員」には含まれていない。[17] 彼の慶應義塾における役割については、詳しくは前掲拙稿「小幡篤次郎考Ⅱ――慶應義塾教職員として――」を参照されたい。

明治四年三月ごろ、慶應義塾は芝新銭座から三田へ移転した。そのころに小幡が山口良蔵に宛てた書簡が、七通残っている。新しい時代を迎え日々塾生が増加しつつあった時期で、福澤を「マーストル」と呼び、英学にかける意気込みが伝わってくる。新しい政治体制への期待や旧勢力に対する認識も表われ、また著作権の問題にも言及している。これらの書簡からは、明治以降くすぶり続けている政治的混乱の中で、英学による社会の変革に

期待を寄せ尽力する彼の様子を読み取ることができる。なお明治四年七月二〇日付の書簡は、『福澤諭吉全集』再版別巻（岩波書店、一九七一年、二〇四頁）に掲載されているが、小幡を知るうえで興味深い書簡であるため、原本校正を行い他の書簡と同様に掲載する。

宛先である山口良蔵は、天保七（一八三六）年大坂の生まれで、父山口寛斎は蘭方医で蘭学塾も開いていた。安政三（一八五六）年福澤諭吉に一年程遅れて、緒方洪庵の適塾に入門し、それ以降福澤と親交を結ぶことになる。自筆と思われる履歴書によると、明治二年二月に紀州藩洋学所の助教となり、翌年二月兵学寮教授、一〇月に兵部省に出仕し、兵学少教授、四年七月兵部省軍事病院医官、一〇月大阪鎮台医官を歴任、六年ごろに家族とともに東京へ移り、一時期は慶應義塾内に住んでいた。軍医寮に勤め、のちに代書人も務めたようである。翻訳書に『舶用汽機全書』がある。病気療養のため、明治二〇年に大阪へ戻り、五月二〇日に歿した[18]。以下書簡の漢字は原則として通行体を用い、句読点は適宜補った。

明治三年八月一六日付

孟秋八日之玉翰並御蔵版三百部、当十一日相達難有拝誦、先以愈御安泰被成御勤候趣奉恐賀候。次ニ師家始幣宅相揃、無異罷在候間、御安心可被下候。マーストルハ些之瘧[カ]被参慥候へ共、さして御気遣申候程之事も無之候間、御放念被為成候。御蔵版ハ岡田屋え売捌共頼置候間、最も三割ニ無之てハ、書林売出しニ、力ヲ尽し不申候故、却て版元之不利なりとマーストル被申候間、三割之所ニ申付置候。左様御承知可被下候。吉川君之尊書も外便有之候間、相頼置候。右貴酬申上度、余ハ後便之時ニ申上残候。謹言。

八月十六日　　小幡篤次郎

山口良蔵様　待史

尚々時下冷折角御保揃専要ニ御存候。甚三郎ゟも宜敷申上度旨申出候。

「御蔵版」の受取と、売捌きに関する岡田屋への依頼について述べている。福澤は、慶応四年閏四月一〇日付で山口良蔵に送った書簡で、「偽版之義ハ、西洋各国ニ而も厳禁ニ而、コピライト抔申法律有之義」と述べており、自身の著作の偽版の多さから、著作権の確立に関心を抱いていた[19]。西川俊作氏の考証によると、この年一一月に福澤は大阪の山口宅を訪ね、その帰路岡田屋の手代とともに、心斎橋のいくつかの書店で『西洋事情』等の偽版を買い求め、それを証拠に「偽版取締に関する願書」を大阪府宛に提出した[20]。翌年正月三〇日に福澤が山口に宛てた書簡では、偽版問題に関する山口の協力に感謝している[21]。本書簡の内容からは、山口の蔵版について、信頼のおける岡田屋に依頼したと考えられ、小幡も出版を巡る問題に関わっていたことが知れる。

書中「吉川君」は、和歌山の共立学舎で英語を教授していた吉川泰二郎のことであろう。福澤の病状について、さして気遣うこともないと述べているが、この年五月に罹った発疹チフスの予後のことであると思われる。一時は重篤であった。

明治三年閏一〇月二三日付

一書拝呈仕候。寒気大加り候処、益御清栄被成御起居奉敬賀候。却説吉川君より伝承仕候処、賢兄も当地は坂地ニて、御翻訳御用御勤被成居候よし、尚紀州之御関係殆と御脱被成候趣、ベスト之御計策と奉伺候。紀州之景況、薄〻伝承仕候ニ以之外之タイラニー、小生共もオポサイト之レゾルトを生候事と被相考候。

附ては松山君も何奈波及なき之地ニ被相立候様致度、御計策も御座候ハヽ、御示シ之程奉希候。
一此度マーストル御帰省相成、定て其御地逗留中御対面も可有候。当地委曲之景況、御承知可被下候。追ニ我党之議論も、有味方有敵之時節ニ可相赴、随分愉快之時ニ相成候。
一愚弟往返之説、屢々貴館へ参上御老人様方御懇意相学候よし、宜御礼奉頼候。
右為差替義も無御座候へ共、任好便御左右相伺度迄。匆々如此御座候。恐々謹言

閏十月廿三日　　小幡篤次郎

山口良蔵様

前述のように山口は、明治二年二月より紀州藩洋学所に勤務していたが、この書簡の頃には兵部省に出仕し、翻訳業務を行っていた。紀州藩では新体制への移行に障害があったと見え、「以之外之タイラニー、小生共もオポサイト之レゾルト」tyranny, opposite, result を生むと考えていることを述べている。紀州藩への評価は低く、ほとんど関係を絶つことが「ベスト之御計策」と伝え、松山（棟庵、紀州出身の蘭方医）も脱することを画策していると告げている。この前年の一〇月一四日付で福澤が山口に送った書簡にも「紀の学校は如何哉、あまり御見込も無御座よし」とある。(22)

この書簡で注目すべきは、時局について小幡が「追ニ我党之議論も、有味方有敵之時節ニ可相赴、随分愉快之時ニ相成候」と語っていることである。「マーストル御帰省」とあるように、福澤は閏一〇月二八日に東京を発って中津へ向かった。このとき中津において、「一身独立して一家独立し、一家独立して一国独立し、天下もまた独立すべし」と主張した「中津留別之書」を認め、また『福翁自伝』で取り上げられているような旧藩重臣たちに

よる藩政に対する諮問があった。『福翁自伝』の記述によれば、このとき福澤は、今の藩士と藩にある武器では戦争などできない、いっそのこと武器を全部売ってしまい、学校を作って「文明開化の何物たるを藩中の少年子弟に知らせると云う方針を執るが一番大事」と、洋学校を建てることを進言したという。[23] 奥村弘氏の報告によれば、同時期に三田藩では、廃藩によって武備を放棄し学で身を立てる構想があり、三田藩大参事白洲退蔵が正権参事に宛てた書簡には、その上表草並び添え書を示された福澤が「コンデナクチャならんと大悦之様子」であったことが記されている。[24]

小幡がいうところの「我党之議論」は、すなわち封建体制を越えた智徳の進歩による新体制の確立と、そのための西洋思想の受容であろう。すでにこの時までに、小幡は後述する『天変地異』『博物新編補遺』『西洋各国銭穀出納表』『生産道案内』といった自然科学や人文科学に関する書物を刊行していた。こうした著訳活動に対し、「味方」や「敵」が分かれるようになった。ようやく人びとの議論の俎上にあがるようになったことが、小幡には「愉快之時」であった。

明治四年正月一五日付

正月十五日之珍翰、四月廿四日相達雀躍拝誦、先以御渾家御揃益御清栄御迎歳被成御座、恐賀此御事ニ奉存候。皆私宅無異加齢仕候条、御放念可被成下候。右年甫御祝詞貴酬申上度、如是御座候。恐惶謹言。

正月十五日　　小幡篤次郎

山口良蔵様

再報

旧冬ハマーストルえ御対面、当地之景況委曲御手領相成候よし。義塾も不日転居、昨今大ニ繁雑相過申候。九州辺ニハビゴット群集、后筑其巣窟たる之風聞有之。広沢ヲ切害候も其党与なりと承候。何共未タキリミナルを捕獲する之事を不聞候

新年の挨拶とともに、追伸では山口が福澤と会い情報を得たことや、慶應義塾が近々移転することが記されている。このころの小幡の書簡は前掲書簡しかり、日本語風に読まれた英単語が頻出する。「ビゴット」bigotと呼ぶあたりに、守旧的な抵抗勢力に対する小幡の認識が窺われる。「キリミナル」はcriminal。

明治四年三月二六日付

国司氏江御托之玉音辱拝見、益御安泰奉恐賀候。当□□御地兵部省え御出仕相成居候趣、折角御軼掌可有之候。甚三郎え御托之上梓一件、縷々御申趣之旨、委曲為申聞候。甚三郎ゟも宜可申上旨申出候。政府も改革相始候よし、過日ハコンスピレートル三百人程囚縛いたし訊問中、未タ何様之プランなる哉、詳細之事を不承候、御地ニも其党与有之。同日三都を焦土となし、帝ヲ奉して大和辺え楯籠る之策なりと云ふ英人傷害之杵築藩並ニ広島藩過日佼罪ニ□御運候。

三月廿六日　　小幡篤次郎

山口良蔵様

兵部省にいる山口から「甚三郎え御托し上梓一件」は、すでに『英国軍艦刑法』（明治二年）や『新砲操練』

（明治三年）の訳書を出していた、弟小幡甚三郎への翻訳の依頼と思われる。「政府も改革相始」る時期に至っていたが、なかには明治政府の開国方針に失望し、政権の交代を企てる人びともあった。ここで述べられている「コンスピレートル三百人程」conspiratorは、公卿である愛宕通旭および外山光輔と久留米藩士らが挙兵し、天皇を再び京都へ移すことを目論んだ計画のことと思われる。発覚後三百人を超える捕縛者があったという。この書簡の時点では、首謀者と目された公卿たちが捕縛されて間もないので、「何様之プランなる哉、詳細之事を不承候」という状況であった。

明治四年四月七日付

四月朔日之玉章今朝相達盥漱拝読、謙和之節益御平寧奉敬賀候。扨福澤マーストル切害之風聞御聞込相成、御驚愕御尋之段御深情厚奉謝候。全ク御地之虚説ニて、絶て右等之事無之候間、御放念可被成下候。マーストル去月より三田え引越、当時普請中ニ候塾舎も落成いたし随分清潔相成且地面も高燥之場所故スコラル之為メ大ニよろしかるへきと相楽罷在候。右要事のみ。匆々謹言。

四月七日　　小幡篤次郎

山口大兄

○別紙の通疾ク差出候積処便ヲ不得、今日迄延引奉多謝候。

○草郷君ゟ別ニ要用無之間、書状不差出候由、宜御致意可申旨被相頼候。

○私事も今月末迄ニは、三田之引移り候都合ニ御座候。

この書簡によれば、当時大阪で「福澤マーストル切害」の噂が流れていたことがわかる。ちょうど慶應義塾は三田移転のときであった。落成した塾舎は清潔で、かつ移転前に塾舎があった芝新銭座は海岸に近く湿気があったが、三田は「高燥」で、環境は「スコラル」school のために「大ニよろしかるへき」と述べている。

「草郷君」は紀州藩士の家に生まれ、慶応二（一八六六）年に慶應義塾に入学した草郷清四郎。小幡も構内に引っ越すとあり、現在残っている最も古い三田構内の地図では、南側の一角に小幡の住居がある。(25)

明治四年七月二〇日付

秋暑未除候所、貴家御揃益御清勝可被成候由奉敬賀候。次ニ小生義無異罷在候へは、乍憚御放念可被成下候。却説、其後毎〻御尊書被成下、何時も御無音のみ申上候段、真乎御海容奉任候。先頃和田氏出府之節ハ御珍蔵御恵投被下、座右之重蔵ニ供へ珍重仕候事ニ御座候。小生義も近日上梓之書御座候へは、出来之呈貴覧度候。将又此度ハ非常之御改革相始り、六百年来之封建ヲ解き、一朝ニ郡県となし候事、手段時勢之助多しと雖ども、千八百年代之美談可有之と被存候。これニて相静り候へは、実ニアジヤチックのエンゲランドと可申と外国人の評ありと承り候。文学も逐日盛大ニ相趣き、御回喜不少被存候。何卒此機ニ乗し、文学ヲ根深ニ植込度ものニ御座候。文学之菓実結後ハ人心少〻変遷あるも、決して大破ニ至らすして、漸く清境ニ入るへき歟と被相考候。これ偏ニ祈る所ニ御座候。

先生も過日中少〻御煩有之候所、通日ハ殆と御快気相成候。至極ニ沈静ニ御暮居候へは、万々御放念可被下候。右為差御義も無御座候へは、此節御地え罷下り候□有之候ニ付、御左右相伺度まて。匆〻如是御座候。恐々謹言。

七月廿日　　小幡篤次郎

山口良蔵様　侍史中

尚〻残暑御加養専要ニ被存候。愚弟よりもよろしく申上可下旨申出候。

七月一四日の廃藩置県の詔を受け、この「非常之御改革」に対して、小幡は大きな期待を寄せている。「六百年来之封建」を解き「一朝ニ郡県」にすることは、時勢の助けがあるとはいえ「千八百年代之美談」であり、もしこの改革で落ち着けば、「実ニアジヤチックのエンゲランド」という外国人からの評価もあると述べている。後述するように、トクヴィルの『アメリカの民主主義』に関心を寄せた小幡が、賛辞としてアジアのイングランドと述べていることは興味深い。彼にとって、イギリスは文明の改革と進歩の象徴であった。

また「文学」が「盛大」に向かうことを喜び、この機会に「文学」を「根深」く「植込」たいと述べている。ここでいう「文学」は、福澤が慶応二年二月六日付島津祐太郎宛の書簡で「中津に文学の教えなし」と嘆いた「文学」同様[26]、智徳の進歩をもたらす新たな学問の意であると考えられる。ゆえにその「文学」が実を結べば、「人心少々変遷あるも、決して大破ニ至らす」「清境」に入ると、「文学」の効果を評価している。

小幡の「近日上梓之書」は、時期から考えて『英氏経済論』を指すであろう。

明治六年四月一四日付

御懇書拝読。頃日は些と御風邪被御取段、未夕御全快不被成御座候趣、為差御事ニも無御座候哉。折角御自重奉祈候。却説、過日ハ度々御来訪被成下、又候今日ハ亡弟え御弔物被成下、御懇情万々奉厚謝候。何れ拝趨御礼可申上候得共、紙中御礼迄、匆々如是御座候。敬白

四月十四日　　小幡篤次郎

山口良蔵様　梧右

この書簡も、前六通とともに保管されていたものではあるが、年代に少しずれがある。山口良蔵宛の福澤の書簡からは、明治六年ごろに山口が一家で東京へ移り住んだことが判明するので、この書簡にあるように、度々訪問するようにもなったのであろう。

書中「亡弟」とあるが、弟甚三郎は明治四年末に旧藩主奥平昌邁とアメリカに留学したのち、同地で病を得、明治六年一月客死している。

二、中津市学校

明治四（一八七一）年一一月、福澤諭吉の提言によって、中津市学校（市校とも称する）が設立された。小幡はその初代校長として、中津に赴任した。かねてから洋学による人材育成の急務を熱心に説いていた福澤は、「中津ニも追〻洋学御開相成候よし」を聞き、学校が創立したあかつきには自分も折々帰郷し、また慶應義塾から人材を派遣するなど協力を惜しまないと述べていた。[27] 明治三年一一月に執筆した「中津留別之書」でも、「洋学の急務なる」を主張し、中津の人びとも「今より活眼を開てし先ず洋学に従事」するよう勧めた。[28] こうした福澤の主張が、具現化したのが中津市学校である。資金は旧藩主であった奥平家の家禄の一部と、士族達の互助組織である天保義社から拠出された。いわば旧中津藩士たちによって設立された学校といえる。拠出金の詳細や運営方法については、拙稿「中津市学校に関する考察」『近代日本研究』一六（二〇〇〇年）を参照されたい。

最初の校舎には、三の丁東端の旧家老職生田邸が充てられたが、のちに中津県が作成した「中津市校洋学出金方法」によれば、最終的には中津の「町在」に四〇か所程の私塾を建てる計画で、生田邸で開校した学校は、まずそれら私塾の教師を養育するための学校であった。[29]

科目は「原書」「訳書」「数学」「習書」の四科が設けられた。規則類は、「東京三田慶應義塾之規則」である『慶應義塾社中之約束』に準じて定められた。『慶應義塾社中之約束』によれば、当時のカリキュラムはまず理学初歩か文典の素読、次に文典の会読、究理書、歴史等の講義、そして経済書のやや「高科」の講義に進んだが、中津市学校は全く同じではなく「都鄙遠近之相違」が考慮された。[30] 自身も中津市学校で学んだ広池千九郎（明治一六年三月卒業）は、「読方、作文、習字、算術、物理、生理、ソノ他トス　マタ一及ノ科目中、読方ハ左ノ書ヲ用ヒタリ。国史略、十八史略、元明史略」（「初忘録」）を学んだと述べている。[31] 使用された教科書のうち洋書については、中津市立小幡記念図書館および県立中津南高等学校に所蔵があり、概要を知ることができる。

教員は、小幡篤次郎、浜野定四郎、須田辰次郎、中上川彦次郎、猪飼麻次郎等慶應義塾から派遣された人物が中心であった。明治一一年一〇月九日付大分県令香川真一宛書簡で福澤は、出費を抑えるため、中津出身者に「中津の学校」だからと言って、他に比べて三分の一ほどの給与で「無理に出張」させていたと述べている。[32]

前述のように、小幡は初代校長として赴任し、明治五年六月まで務めた。新しい洋学校を創立し、運営を軌道に乗せるには、それにふさわしい力量が必要であり、中津の人びとから厚い信頼が得られることも重要であった。小幡は福澤との関係だけでなく、同藩の上士階級の出身で、藩校進修館で教鞭を執った経験もあり、就任者として申し分なかったといえる。また「学問のすゝめ」初編に同著として名を連ねているのも、校長としての立場への配慮であったとも言われる。

小幡は着任すると、英書によって学ぶ以外に「訳書」科を設けた。明治五年三月二三日付高力衛門宛福澤書簡には「（小幡篤次郎が）原書教授傍専ら翻訳書を為読候趣向にて、頻りに訳書の学を主張いたし居候」とあり、「訳書」科は彼の進言によったことがわかる。[33] より多くの人びとが学ぶためには、年少者や村方の者にも配慮し、実情にあった科目を考えたといえる。同書簡では福澤自身も「全日本国内の人民をして悉皆原書家に為さんとするは、人力の及ぶ所にあらず」と述べている。前出広池千九郎の著作『中津歴史』には、本科と別科が設けられ、前者は「専英語ニヨリ」後者は「訳書ニヨリ」西洋の「究理ノ実学」を学んだとある。[34]

『中津歴史』によれば生徒数は順調に増え、明治八、九年には付属学校も含めておよそ六〇〇名余にも達した。校内では「弁説会」と称する演説討論会が開かれ、会議法が講じられ、また椅子と机、洋装、洋食など西洋風の生活様式が取り入れられた。欧米の文化は常に市学校から発信されると目され、「関西第一ノ英学校」と言われるまでに発展した。[35]

しかし西南戦争の勃発とその後の不穏な経済情勢は、生徒数の減少を生んだ。その後公立学校との合併話が起こるが、成功することはなかった。明治一一年一〇月九日付大分県令香川真一に宛てた福澤の書簡によれば、合併話はこの時が初めてではなく、しかしうまく相談を進めていても「些末無用の事」から争いになり「又例の不熟不和」が起こる。今回はもし合併に至れば、その後半年か一年の間は、小幡篤次郎に中津に出張するよう依頼したと書かれている。[36] ここからも福澤、中津側双方からの小幡への信頼の厚さが窺われる。

明治一二年末になると、今後の市学校のあり方を決定するため、東京と中津の両方において「市校世話人」を選出し、両地で定期的に「市校事務委員集会」を開いて検討することになった。小幡も「市校世話人」に選出された。「市校事務委員集会」の明治一二年一二月一〇日から明治一六年四月一七日までの東京における会合の記録

が、「市校事務委員会録事」と題されて残っている。それによれば、中津市学校の資金は、授産事業にも使われている。詳しくは、前掲拙稿および同「小幡篤次郎考Ⅰ―書簡にみられる中津士族社会との関わり―」に譲るが、特に士族授産事業として定着していた養蚕製糸業において、小幡の果たした役割は大きい。養蚕の伝習から桑苗の購入にいたるまで、小幡が力を尽している。明治一六年四月四日付で山口広江に宛てた小幡の書簡によれば、日本初の株式会社である二本松製糸会社社長の佐野理八が、中津における養蚕業の進歩をともに喜び、「養蚕有志之男女」があれば年に五人ずつ無費用で研修させてもよいと、申し出てくれている。[37] 次に掲げる書簡では、小幡が佐野を「年来知音の人」と紹介しており、佐野の申し出も小幡との関係からと言える。書簡の宛先和田（義郎）は、慶應義塾幼稚舎長を務めた人物で、佐野理八の息子市蔵も慶應義塾幼稚舎に入学している。

前略。陳ハ福島之人芳賀卯之吉君、同所佐野理八と申人ニ頼まれ、貴校之御趣一覧仕度旨、右理八と申人ハ小生年来知音之人ニ御座候。何卒御指支なくハ、御校内御示し被下度奉願候。此段申上候。拝具。

七月一日　　篤次郎

和田様

結局明治一六年一月二一日の市校事務委員集会で、中津市学校の閉校が決定した。閉校にあたっては、残余金の処分などをめぐって、中津士族社会を二分する対立になるが、その収拾にあたったのも、やはり小幡篤次郎であった。同年三月小幡は中津に出張し、閉校の主旨を演説している。[38]

洋学による人材育成は福澤の念願であり、彼の構想を具現化するものであったが、その実現には小幡が欠くべ

からざる存在であった。小幡の人脈や、その人脈から得ている信頼がなければ、成し遂げることはできなかったといえる。そして小幡は単に福澤の代理であった訳ではなく、彼の志向と力量によって、「訳書」を設けるなど中津市学校を充実させていった。そこに見られる彼の意図は、洋学の受容層を広げることであった。原書を理解することができる一部の知識層に止まらず、広く多くの人びとに洋学への門戸を開くことであったといえる。

三、三田演説会

三田演説会は、明治七（一八七四）年六月二七日に発足した。「三田演説会之序」（「三田演説会規則」『会議弁』所収）によれば、その目的は「余輩爰ニ社友ヲ会シ互ニ演説・弁論ノ伎倆ヲ研究シテ、傍ラ見聞ヲ開カント決シ」とあり、演説と弁論の技術的練磨と、その内容を通じて西洋思想を学ぶことの双方が掲げられていた。[39] 小幡篤次郎、中上川彦次郎、森下岩楠、和田義郎、小泉信吉の五名が幹事に選出され、小幡が会頭に就任している。三田演説会については、松崎欣一氏による詳細かつ膨大な研究成果が『三田演説会と慶應義塾系演説会』（慶應義塾大学出版会、一九九八年）にまとめられている。

発足までの経緯は、『福澤全集緒言』「会議弁」の項目に次のように書かれている。[40] 明治六年春夏の頃に、小泉信吉が英書を携えて福澤邸を訪れ、西洋諸国にかくまで必要なスピーチが日本において不必要なはずがなく、不必要どころか政治においても教育、経済においてもスピーチの方法がないがために、当事者双方で誤解を生じることも少なくない。ぜひこの「新法」を日本国中に知らせてはどうかと提案した。そこから『会議弁』の翻訳が始まり、翻訳後規則が出来たので、ついては実践してみようということになり、「確か明治六年の梅雨中の夜」に福澤宅の西洋館に集まり、福澤が議長席に着き、小幡、小泉、藤野、須田らで論会をした。その時は籤引きで二

手に分れて、議題は「当時世上の問題となつて居つた士族の家禄なるものは一体プロパーチーであるかサラリーであるか」property, salaryであったという。[41]

発会の約一年後になると、明治八年五月に三田演説館が開館し、小幡は席上次のような祝辞を述べている。[42]明治七年六月二六日の夜から、ヨーロッパで行われている「テベイチングソサイエテイ」をまねて、社友一二、三名で、演説の稽古を始めた。当初は思うところをうまく口に出すことができなかったが、今や人びとの前で意思を述べることに快さを覚えるまでになった。今後はより勉励して方法を学び、「傑出ノ演説家」を生む工夫が必要である。日本ではまだ「演説ノ要務」が認められていない。これまでも「明弁能講ノ士」がいなかった訳ではないが、「能弁」を吐露し衆人に聴くかせる方法がなかった。ゆえに社員が「同心協力」して方法を講究し、「歴史上ニ一紀年」を作らなくてはならない。「望洋ノ嘆」もあるが、決して期待できないことではなく、「今日ノ醜」や「今日の拙」を後ろ向きに捉えるのではなく、完成した三田演説館を意義のあるものにするよう努力協力すべきである。小幡の言葉からは、「演説」への関心と期待の高さが窺える。

三田演説会については、基本的な資料として次のような記録が残っている。

①三田演説日記　第一号（明治七年六月二七日～八年七月一七日）
②三田演説日記　第二号（明治八年八月二九日～一四年五月二八日）
③三田演説会誌　第三号（明治一四年六月二五日～二五年六月一一日）
④三田演説会記録　第四号（明治二五年一〇月八日～三三年一月二七日）[43]

先の須田の回想や小幡の祝辞から、発足時から小幡が関わっていたことは知れるが、第百回三田演説会（明治一〇年四月二八日）で福澤は「明治七年社友小幡小泉其他諸君の発意にて討論演説の会を起し」と述べ、[44]また第

四百一回三田演説会では、小幡自身が「諸君今日は演説が始まつて以来四百一回と申す大層な数になりましたが、其演説の極くの始りは茲に罷出ました、私である」と述べている。[45] こうした談話や初代会頭に就任したこと、前掲①から④の基礎資料の内容から、小幡が三田演説会において中心的役割を担ったひとりであることがわかる。

自由民権運動家として知られる植木枝盛は、三田演説会に足を運んでいた人物で、彼の日記には、前掲の三田演説会関係の資料では演題が記されていない時期の演題に関する記事がある。その中で小幡については、明治八年六月一九日、七月三日、九月四日にそれぞれ「学者職分論」「自然に任すべからざる論」「人に依りすがつて守りを受ると開化を妨ぐる」の演説を聴いたことが記されている。[46]

「学者職分論」については、住田孝太郎氏により、福澤の『学問のすゝめ』における「学者職分論」とは異なる、小幡自身のものであろうことが指摘されている。[47] また「自然に任すべからざる論」は、松崎欣一氏の考証によれば、ミルの著作の「訳出」で、「七月三日演述」として同年八月二日付『郵便報知新聞』の論説欄に掲載されており、こののち一〇年九月に刊行された『弥児氏宗教三論』と比べると「実際の演説の口吻が残るようにも思われる」とある。小幡の『弥児氏宗教三論』翻訳については、詳しくは五節で述べるが、原書の刊行は一八七四年、すなわち明治七年になる。八年七月三日の演説ですでに取り上げていることから、刊行後非常に早く入手したと考えられ、小幡のこの問題に対する関心の高さが窺える。前述のように、明治七年四月に入塾した鎌田栄吉は、小幡の『宗教三論』の講義を聞いたと回想しており、演説や講義を行いながら、訳文を練っていったと推測される。松崎氏は、『郵便報知新聞』では「造化」と表現されているものを、植木は日記に書き留める際「自然」という語を用いていることが、興味深いとしている。[48] 小幡は単行本では「天然」を用いているので、演説においては小幡自身が「自然」あるいは「天然」を用いていた可能性も考えられる。

八年九月四日については、前掲の資料では登壇者に小幡は含まれていない。前後の会合を見ると小幡は旅行に出ていて欠席となっているので、植木の思い違いかもしれない。また一〇年一月二四日には、植木は槍屋町医学会社での演説会に出掛け、福澤・小幡、江木（高遠）、井上（良一）、矢野（文雄）等の演説を聞いている。[49]

小幡が三田演説会をどのような活動の場と考えていたのか、『三田演説日記』の次の記事はそのひとつの側面を示している。明治七年十月十七日条によれば、彼は雑会のあり方について提案をした。雑会とは、自分の持論や自他の著作を取り上げて演説し、それに対し批評を受ける会合である。

雑会ノ時ニ当リテハ銘々我ガ読了リタル一章之文ヲ書籍ヲ用ズシテ平常ノ談話ノ如ク、文章ノ大意ニ非ズシテ其一語一字ヲモ脱セス成丈ケ文章ノ語意ニ随テ一章ツヽヲ講説セバ如何。尤成丈ケハ原書ヲ可ナリトス[50]

小幡の提案は、なるべく原書を取り上げるが、原文をそのまま使用するのではなく「平常ノ談話」のように平易にする、しかし原書の大意を伝えるのではなく、一語一字も脱することがないように、できるだけ文章の語意に従って一文一文解説するというものである。この提案の意味するところは、平易な言葉を使うことによって、聴衆を幅広い層に拡げること、なおかつ丁寧に一文一文解説することによって、原書を読む語学力が不足していても、あたかも原書を読んだように、その内容全部を吸収できるようにすることであろう。中津市学校において「訳書」による講義の必要性を主張したことと、同様の意図をくみ取ることができる。

また同日におこなわれた、会員の増加に関する議論では次のように述べている。

会員ヲ増サントシテ選挙不精密ノ恐レナキニ非サレトモ、一方ヨリ見レバ会員大勢ナラバ議論ノ勢ヲ増シ、終ニ卓絶ノ会員入社スルノ望アルベシ[51]

三田演説会は初期にはかなり厳格な審査基準を設けて、会員を制限していた。新会員を増やすことは、会員の増

加自体が目的となってしまい、会員中に不和も生じるのではないかと心配されていたが、しかし小幡は、多少の問題が生じても、人数が増えれば「議論ノ勢」が増し、開化をひろげることになると主張している。ここからも西洋から新たに流入した思想的恩恵を、一部の知識層にとどめてはいけないという小幡の基本姿勢を知ることができる。

四、交詢社

交詢社設立の下準備は、福澤が明治一二（一八七九）年七月三一日付で阿部泰蔵に宛てた書簡に「社中集会の義に付、先づ其下た相談致度」と記していることから、同年の中頃から始まったと推測される[52]。そして福澤の言葉を信じるならば、設立の発端は、次のような小幡篤次郎らの発案による「同窓会」のような組織であった。

義塾の同社は小幡君の発意にて同窓会の事を企、昨今略緒に就たり。

（明治一二年八月二八日付奥平毎次郎宛書簡）

近日小幡篤次郎始社友三十名計の発起にて文学講究時事諮詢の為一社を結ばんとて昨今相談中、不日社則も出来可申、出来の上は必ず御報知御入社を促し候事と奉存候。

（同年九月二二日付原時行宛書簡）[53]

当初の発想が「同窓会」のような組織であったことは、同年九月二日に神田美土代町三河屋で開かれた、創立準備のための第一回会合に集まった三一名のうち、慶應義塾の卒業生でなかったのは江木高遠一人であったことからも想像できる。また小幡が中心的役割を果たしたことは、朝吹英二や門野幾之進らの回想や、創立時から一八年間幹事を務めたことから窺い知れる。社則起草委員を務めたのは、小幡篤次郎、小泉信吉、馬場辰猪、阿部

泰蔵、矢野文雄の五名であった。[54] 福澤は委員ではないが、明治一二年に出された書簡の中で、判明しているだけでも二一通で交詢社について説明し、一一通で入会を勧誘している。

小幡や福澤は、なぜこのような組織を作ろうと考えたのであろうか。福澤は交詢社発会式の演説のなかで、「封建ノ時代」の人びとの「知識交換世務諮詢」の方法は、藩によって支えられていたという。各藩は「会社」のように人心を結合し、情報のネットワークの中核をなした。各藩が三都（江戸、大阪、京都）に設けた藩邸は、地理的にも、また各藩との恒常的な交流からも、情報収集の場であり、その際藩の名は情報の信憑性の担保ともなった。[55]

しかし明治になって封建体制が崩壊し、人びとはあたかも「会社」のごとき所属先を失い、「信任確実」なる「人の言行」を得ることができなくなった。幕藩制度の崩壊により、身分的制約や空間的制約が減少したことで、情報の伝播圏が広がり、また海外との交易や文化の流入によって、情報の量も格段に増加した。しかし、同様に信憑性も増したかといえば、そうではなかった。前掲の山口良蔵宛小幡書簡の中からは、明治四年の大阪で福澤切害の噂が流れていて、東京の小幡まで確かめるしかなかったことがわかる。情報環境を考えれば、これまで藩邸が担っていたような、「信任確実」な情報を得ることができる、新たな組織が求められるようになっていた。

また前出小幡の書簡にあったように、「六百年来之封建」を解かれ一朝にして郡県制となったことは、単なる行政上の変更だけではなく、人びとから帰属先を奪うことを意味した。特に明治一〇（一八七七）年ごろまでの慶應義塾で中核をなしていた士族層にとって、藩を失うことはアイデンティティを失うことであり、かつ情報のネットワークの核も失うことであった。[56] 前述のように明治六年ごろの福澤邸における討論会で、「士族の家禄なるものは一体プロパーチーであるかサラリーであるか」が議題となり、明治七年八月八日に開かれた第八会三田演説

会でも「士族ノ家禄奉還ノ所置ハ善キヤ悪キヤ」が討論された。[57] 結果は、家禄は「サラリー」であるというものであったが、家禄を議題として取り上げる背景には、士族の存在意義に対する確認行為があるといえよう。

さらに発会翌月に創刊された機関誌『交詢雑誌』は、会員が知りたい案件について調査して掲載する、問答欄に多くの紙幅をさいた。[58] 在京の会員のみではなく、全国に散在する人びとの間の知識交換、世務諮詢をめざしたのである。

交詢社は、同窓会的発想にはじまり、封建的組織に代わって、構成する人びとに対してアイデンティティを与える組織になった。そして、コレスポンデンスマガジンともいえる『交詢雑誌』の発行によって、都鄙間の格差を是正しながら、知識や情報の交換に信頼を付与できる組織を目指したといえる。

一方交詢社の政党的側面、時に小幡に組織の政党化への志向があったのではないかとも指摘される。確かに、明治一四年四月二五日付『交詢雑誌』第四五号に掲載された（ほぼ同文のものが同年五月二〇日～六月四日付『郵便報知新聞』にも掲載）交詢社の私擬憲法案は、イギリス流の議院内閣制導入を念頭においたもので、発表されると大きな反響を呼んだ。矢野文雄の回想によれば、憲法案作成は小幡が発端であるという。[59] 小幡は立憲制度を目標とすべきことを説くとともに、ヨーロッパの憲法をそのまま利用することはできず、日本の国にあった憲法を研究する必要があると提言した。その後小幡を中心に、五、六名で週一、二回交詢社で会合を重ね、憲法案が練り上げられた。交詢社の私擬憲法案は、明治一四年三月に大隈重信参議が提出した、議院内閣制をとる憲法意見書との類似もあり、広く世間に流布し、憲法議論を呼び起こした。そして小幡が同年一月の交詢社設立一周年記念の席上で、未だなお「結社ノ本源タル政党」なきを嘆き、「政党ヲ出スモ亦遠キニ非サル可シ」と演説したことや、[60] 私擬憲法案発表の翌年には立憲改進党の設立に加わっていることから、社則では政治に関する議論を

行わないことになっていても、実際には「三田政党」と呼ばれても仕方ない側面があったと指摘される。[61]

しかし住田孝太郎氏は、前掲論文の中で「彼が重視したのは人々の「結合」「団結」という「人心の繋がり若しくは人心のまとまり」で、小幡の政党への期待は「政党を手段とする直接的な権力追求、政権奪取行為というものではなく、種族の結合や宗教の結合といった国民的な紐帯の形成、ナショナリティの構築であったと思われる」と分析している。[62]

前述した設立一周年記念の際の演説冒頭で小幡は、設立一年で社員が減少したのは「雷同附和ノ人士」が去ったからと推測しながらも、さらなる減少を心配し、現代は「結社協同ノ難事」であるという。歴史的な経緯によって種族・宗教・将卒といった結合は衰退し「結社協同」がむずかしくなっている時代に、彼はあえて交詢社設立に取り組んだ。新たな働きかけによって、結社の有効性を主張したいと考えていたことが読み取れる。「結社」が「習ヒ性」となり、「団結協同」が自明となることが必要であると考えていた。ゆえにこの演説の最後には、政党が出来て「結社ノ習慣」が「興隆」すれば、交詢社も盛んになるという。演説全体をみれば、彼の主張は政党そのものにはなく、自覚的な結合、いわばネットワークの形成とその習慣化にあったことがわかる。

最後に、交詢社のネットワークとしての役割を示す、小幡の書簡を二通紹介する。いずれも慶應義塾福澤研究センターの所蔵である。

久敷御音問不申上候処、時下秋冷益御清福被成御座奉恭賀候。然ハ九月十九日之貴帖到来、五月十五日御類焼、七月十五日御内政様御長逝、御左幼御保護之住宅中、緑林児の難ニ御罹り之由、災厄一時蝟集御苦心奉察候。折角御慰情可有之候。夫ニ就き御質問之件、鄙考申上候。幸ニ御取捨可被下候。

夫ヲ亡フノ婦年尚若キトキハ、再嫁スルヲ適理ト為ス。猶ホ男子壮年ニシテ妻ヲ亡フトキ再縁スルガ如シ。二夫ニ見ユルヲ不貞ト為スハ、支那圧制ノ遺俗ノミ。婦ト為ルノ間ニ二夫ニ見ヘザレハ、貞操ノ婦タルニ妨ケス。寡婦再嫁ヲ適理ト為ストキハ、男子ノ後妻ヲ迎フル固ヨリ適理ナリ。同時ニ数婦ヲ娶リ同時ニ数夫ニ見ルハ、今日ノ法律一ヲ恕シテ二ヲ許サス。道徳上ヨリ論スレハ、斉シク罪アリトス。

余ノ二問ハ、前文ヲ以テ是非判定スヘキナレハ、別ニ贅議ヲ載セス。

右貴答申上候。何ハ兎ニアレ御左幼御保護之際、御後妻御迎何之御故障歟可有之、重〻御遭厄御衷情御鬱滞も候へきなれども、七転八起之諺も有之候通、御爽快御起居可被成御座候。右疎濶之罪奉謝候度迄。匆々如是御座候。

敬具。

十月十四日　　小幡篤次郎

佐藤弥六様

【封筒表】陸奥国弘前元大工町三十三番地　佐藤弥六様　貴酬

【封筒裏】緘　小幡篤次郎

これは津軽の佐藤弥六からの質問に答えたもので、封筒の消印から明治一三年と推定される。質問の内容は妻が亡くなって間もなく再婚することの可否についてと考えられる。文面によれば佐藤家は火災の類焼にあい、続いて妻が亡くなり、さらに盗難にもあうという不幸続きであった。文中「夫ヲ」から「罪アリトス」までは楷書体で書かれており、すでに発表した論説の引用のようでもある。小幡の意見は、同時に二夫と見ゆる、二婦を娶るのは不貞であるが、寡婦の再婚や後妻を迎えることは適理であるというもので、幼子のことを考えれば亡くな

って数か月で後妻を迎えても、支障はないとしている。明治一三年は刑法が公布された年で、新しい刑法では新律綱領以来、妻と同等の二等親として法律上に存在した妾の記載がなくなった。質問の背景には、このような変化も考えられる。

厳寒如何被成御凌候哉。益御清穆被成御座候事ト奉賀候。陳ハ過日下総椿村社員菅治兵衛氏来訪之節被申候ニは、頃日貴下より醤油醸造方法御問合ニ相成り候ニ付、委曲御返事ハ可致候なれども、何分詳細ハ筆帋ニ難尽、果して御醸造ニ相成候ハヽ、一度御来遊実地之模様御一覧候様致度、必す夫程之御利益可有之と申事、序もあらハ小生より可申上と、懇々申陳候ニ付、御勘考可被申進候。又酒造も本年より加税如何御見込ニ候哉。愚考ニては、本ハ造石高余程減少可致、其割合ニ飲酒家ハ不減、造り続候人ハ随分有利之望有之義欤と被存候。此又御取捨可被下候。菅氏伝言申上度旁、如是御座候。拝具。

一月廿二日　　小幡篤次郎

広中宏次郎様　梧右

二通目は三河国渥美郡の酒造家広中鹿次郎に宛てた書簡で、文中に醸造税が造石高による課税となることと、その影響について書かれていることから、明治一三年九月の醸造税の改定以後、明治一四年一月と考えられる。広中は、酒税醸造税の改定を鑑みてか、醤油の醸造を開始しようと考え、下総匝瑳郡椿木村の菅治兵衛に方法を尋ねた。菅は百聞は一見にしかずと、実際に見学することを勧め、小幡が仲介している。

『交詢雑誌』に付録として付く「交詢社員姓名録」によれば、佐藤弥六および菅治兵衛は明治一三年から、広

中鹿次郎は明治一四年から交詢社の社員となっている。これらの書簡は彼らにとって、交詢社が新たな情報のネットワークであったことの証左となろう。

五、言論活動

（一）著訳書

本節では、明治一三年の交詢社設立ごろまでの、小幡の言論活動を取り上げる。単行本としての出版は、翻訳によるものが主となるため、彼自身の言葉である序文を中心に考察する。以下太字は表紙もしくは扉に記された書誌情報、序文のタイトル、序文の筆者表記を示している。また原書の書誌情報は推定できる範囲で示した。

『英文熟語集』　小幡篤次郎　同甚三郎纂輯　慶応四年戊辰三月　尚古堂発兌

「英文熟語集序」　慶応四戊辰年三月　中津　小幡篤次郎識

序文には、上梓の理由について次のように書かれている。英書を読む者が日一日と増えているが、辞書といえば英和対訳の袖珍辞書しかなく、しかし実際に英書を読むにあたっては、前置詞や副詞が組み合わさってできるイディオムがわからないと苦労する。そこで自分たちがわからずに師友に尋ね、また辞典を調べて集めていたものを、ウェブスターなどの辞典等によって増補刪正して出版する。この書は、初学の人々の「小補」になろう。

小幡篤次郎の最初の著作であるこの『英文熟語集』は、弟甚三郎との共著であり、英語学習のための実用書であった。藩校で儒学を教える立場から英学を学ぶ立場へと変化し、二年後の慶応二年には幕府開成所で、再び今度は英学を教える立場になった小幡であるからこそ、学習に補完的な役割を担う書を作り得たといえよう。なお本書は、昭和五七（一九八二）年にあき書房（広島）より復刻版が出版された。

『天変地異』　小幡篤次郎著　明治元年戊辰初秋　慶應義塾蔵版之印

「天変地異序」　慶応四戊辰年八月　慶應義塾同社識

序文では、まず孔子を引き合いに出し、儒学の教えでは「怪力乱神」のような「怪し気」なことは、口にも出さず筆にも留めず、人の「思議」することではないとこれまで論じられてこなかったが、あえてそのような事柄を西洋の書物を翻訳して解説をするのは、「天変」は変ではなく「地異」は異ではないということを説明するためである。本来なら「天変地異の解」と題すべきものであるが、「句調」を重んじて「天変地異」と題する、と述べる。

世間で「天変地異」と言われているようなことは、実際には「理」のあることで、むしろ見慣れ聞き知っていて「異変」とは思わないことに、かえって驚き怖がるべき事柄がある。たとえば朝に日が昇り夕に没するといった現象は、千万年も続くので等閑に打ち過ぎているが、道理を理解しているわけではない。雷を「天の怒神の所為」、彗星を「兵の兆」、地震を「神霊の怒り」と唱えているが、これらはいずれもわかりやすい「理」によって起ることである。（この本では）「理」を説明し、驚くべきことや怖がるべきものを弁察し「世の幸福安全」を願う。

小幡は「理」があって生じる自然現象に対し、これまで儒学が対象としてこなかったので、人びとは民間信仰や迷信に陥り、その「哀れむべき」状態を解くという。目次は以下のようなものである。

雷避の柱の事
地震の事
彗星の事

虹霓の事
九日同時に出たる事
三月並び照す事
流星並に火の玉の事
陰火の事

意味を表わす言葉も多く含まれた総ルビであり、また多くの図説が取り入れられている。子どもであっても理解しやすく、教科書用だけでなく一般向けとしてもよく売れたと思われ、管見の限りでも少なくとも七種類の版本が存在する。出版の時期が、「戊辰初冬」となっている版もある。「慶應義塾蔵版」のちらし文字がある表紙は、偽版の可能性が少ないと思われるが、他は偽版もあるかもしれない。それだけ多くの読者を得たといえる。版本による序文の違いはないが、使用されている変体仮名には異同がある。

見返しには、闇夜を切り裂く稲妻と、避雷針が立っている西洋の塔が二つ（うちひとつに「小幡篤次郎著」の文字）、手前に風に翻る旗が立った建物（側面に「慶應義塾蔵版之印」）が描かれている。同じ絵柄の封筒が附属しているものも存在する。封入して販売したのであろう。

また明治六（一八七三）年九月（見返しには「紀元二五三三年九月」）には、鳥山啓著『変異辨』が出版され、その凡例には次のようにある。

小幡氏の著されたる天変地異ハ其文簡約にして其理解し易く婦人小児も誰もよく読得べきを以て大に小に行ハれ之か為に惑を解き疑を開く者甚だ多し其功亦大ならずや

『変異辨』は、『天変地異』に漏れたものを拾って解説するとし、ここからも『天変地異』の需要の高さが窺わ

れる。

『博物新編補遺』　小幡篤次郎訳述　明治二年己巳仲春　尚古堂発兌　上・中・下

「博物新編補遺序」　慶応四年戊辰中秋某日　慶應義塾同社　小幡篤次郎誌

序文冒頭は「人以テ知ルヿナカル可カラス知ルヿナキハ禽獣ニ近シ」に始まる。目で見て、耳で聞き、鼻で嗅ぎ、口で味わい、皮膚で感じた、その「五官」からの報告を処分し司るのが脳である。ゆえに五官と脳があれば、知ることはむずかしくないという。中国で著された「英国ノ士合信氏」の『博物新編』は、窮理の端緒を開き、人びとを「大知ノ域」の門戸に導き、我が国でも読者が多い。自分は英国の「チャンブル」氏の著書が、「天文地理」「格物窮理」（物理）「動植物」を論じ、「世の盛衰興亡。人ノ身体霊心」に至るまで小冊子の中に遺漏なく説明されており、「西洋文明開化ノ由テ来ル所ノ原アルヲ知ラシムヘキ宝鑑」、すなわち西洋文明が成立する基盤を教える絶好の書籍であるゆえ、漢語である『博物新編』が読めない読者のために、翻訳出版するとしている。

小幡は、英語のみならず漢語でも読むことができない、儒学を充分に学んでいない読者に対しても、「西洋文明開化ノ由テ来ル所」を知らしめたいと考えていた。英学を学んだ自分たちが翻訳に従事し、これまで学問経験のない人びとであっても、「大知ノ域」に進むための門戸を開くことができるよう、仲介者とならなければならないと考えていたことが窺われる。

小幡が述べている「チャンブル」氏は、これまでも指摘されているように、英国のチェンバーズ兄弟社が刊行したチェンバーズ教育叢書の一冊という意味である。福澤諭吉が『訓蒙窮理図解』（明治元年）を著す際にも用いた、Chambers's educational course, *Natural Philosophy, for use in schools, and for private instruction*, 1865

London & Edinburgh であろう。

『西洋各国銭穀出納表』　小幡篤次郎訳　明治二年己巳初冬　尚古堂発兌

「序」　明治己巳初冬　慶應義塾同社　誌

初めに、小幡は次のような疑問を投げかける。国の強弱は、その国の貧富と大いに関係する。貧弱な国は富強な国と対抗できない。しかし富国とは、政府の富を云うのか、国民の富を言うのか。もし富が国民の富にはならず、政府の富にしかならないとすれば、誰が身命を惜しまず田畑を耕し国土を守るであろうか。国の貧富は政府の貧富ではなく、国民の貧富にある。

そして英国の例を挙げる。世界万国の中で英国ほど貧しい政府はない。七億余万ポンドの負債を抱えている。しかし租税が苛ならず、私有が固定しているため、国民は皆「飽暖ノ思」をなし、「倉廩充テ礼節ヲ知ル」の言葉通り、学校や寺院が設けられ「教化ノ道」に進んでいる。一方トルコや中国を見れば、政府の負債は少ない、あるいは無いが、租税が苛酷で人びとは飢寒に苦しみ、ゆえに国は貧弱で欧亜諸国に対抗できない。「世ノ士君子事ニ会計ニ従フモノ」は、この書により「貧富強弱ノ源」を尋ね「河道」を得てほしいと述べている。

凡例によれば、原書は「千八百六十九年英国開版マルチン氏の「ステートスマン・イールブック」Martin, Frederick *The Statesman's year - book* である。

小幡はここで、「国」という単位で他国と比較することによって、自らの「国」の成り立ちを考えることを提議し、経済的には国民本位の立国をめざさなければ、「富国」にはなれないことを説いている。

『生産道案内』　小幡篤次郎訳述　明治三年五月新刻　尚古堂発兌　上・下

「序」　明治三年庚午三月　小幡篤次郎訳

『経済入門　一名生産道案内』　小幡篤次郎抄訳　明治十年六月刊行（抄訳出版人　小幡篤次郎・売捌書林　丸屋善七）

「序」　明治三年庚午三月　小幡篤次郎訳

序文で説くのは、生産は国が存在する所以となる「至重」のものであるということである。生産が立たなければ、人間はその本心を守ることができず、禽獣と同様になり国家が成り立たなくなる。それほど重要なものであるのに、日本においては生産を立てる道について、世間の人びとが知らないという痛ましい事態である。この本を翻訳するのは、「世の婦人小児」に少しでも生産の道への関心を生じ、後日の幸福を祈るためである。

小幡はこうした内容を理解するためには、さらに基礎的な概念を知ることが必須であると考え、原書に加えて初歩的な教科書「マンヂヴール」Manziburu 氏の『第四リーダー』から追加の翻訳を行った。追加された三項目は、「通用貨幣の事」「外国貿易の事」「国内売買の事」で、最初の「通用貨幣の事」では、貨幣を通用させることがなぜ便利なのかについて論じ、続く「外国貿易の事」では、外国との交易が「富」と「幸」をもたらす構図について、「国内売買の事」では、労力やコストを「骨折」という言葉で説明し分業について解説している。

本文は、凡例によれば「友人渡部一郎が翻刻せる経済説略といふ英国開版の原書」を翻訳したもので、原書は Whately, Richard *Easy Lessons on Money Matters, Commerce, Trade Wages, for the Use of Young People* である。

小幡はこの書のなかで、「物ノ値」は価値やコストによって決まるものであり、強制的に決定することができないことや、蓄財、自由競争、私有の重要性、需要と供給のバランス、分業などについて紹介している。また「富

人」の余剰財産があってこそ経済が発展するといった、封建社会の中では一般の人びとの間に育つことがなかった観念について説明している。

『生産道案内』は明治一〇（一八六七）年になると、『経済入門　一名生産道案内』の名前で再刊される。内容は同じであるが、前者はほぼ総ルビで、主に意味を表す言葉が丁寧に振られている。それに対し後者では、ルビの数は平均して一頁に一～二箇所である。明治一〇年代に入って、人びとの読解力が進んできた証左といえ、それは『経済入門』というタイトルにも感じられる。だが小幡は、明治一二年に中津に帰省した際人びとの前で「分業の利」を説いたように[63]、まだ経済学の入門書が必要な段階であると判断し、形状を変えて出版したのであろう。ここにも小幡がより幅広い層による西洋思想の受容を企図していたことが窺われる。

□□

『英氏経済論』　小幡篤次郎訳　明治四年新刻　尚古堂発兌　初編・二編・三編

＊明治六年再刻時に「初編」の文字が入る。

『英氏経済論』四編・五編・六編　小幡篤次郎訳　明治六年八月新刻　小幡氏版

「序」　壬申十一月　小幡篤次郎　誌

『英氏経済論』七編・八編・九編　小幡篤次郎訳　明治十年十月新刻　小幡氏版

「序」　明治十年九月　訳者敬記

『英氏経済論』は小幡の著訳書の中で、最も大部なものである。九巻からなり、明治四（一八七一）年から出版を開始した。その後、同年に二編（巻之二）と三編（巻之三）、明治六（一八七三）年に四編（巻之四）五編（巻之五）六編（巻之六）、明治一〇（一八七七）年に七編（巻之七）八編（巻之八）九編（巻之九）を出版している。

初編は凡例のみで翻訳者による序がないが、四編と七編には小幡による序が付されている。[64]

フランシス・ウェーランド（一七九六年～一八六五年、アメリカブラウン大学第四代学長）の『経済書』Wayland, Francis *The Elements of Political Economy* は、福澤諭吉が慶応三（一八六七）年に、二度目にアメリカを訪問した際に購入したものである。帰国後、彼はこれを用いて講義を行った。しかし明治二年八月版の『芝新銭座慶應義塾之記』では、代わって小幡篤次郎が「ウエーランド氏経済書会読」を「月曜日木曜日　第一時ヨリ」担当している。[65] 藤原昭夫氏によれば、同書は資本主義経済の構造をわかりやすく解説したものであるとともに、「古典学派の経済学説の基礎の解説書」で「人生読本、処世訓集成の趣も兼ね備え」たものであった。[66]

初編から三編までは『生産道案内』同様、読みではなく意味を表すルビが丁寧に付されていて、初学者向けに経済学の知識を伝えようとする努力が見られる。しかし四編以降ではわずかに外国の地名や読みなどに振られているに過ぎない。四編の序には、「儒流ノ徒」が「農本商末ノ説」を唱え、交易がふるわないことについて、商が発展しなければ人は幸福を遂げられず、「開化ノ大段落」にも進まない。交易は五大洲と行ってもまだ足りず、また一日でも交易がなければ、幸福を保つことはできないと説く。最後には「阿駄武須美巣氏」が「富国ノ要」を看破し「交易ノ理」を詳らかにしたことを述べ、「儒流ノ徒一度此ヲ繙閲セハ自ラ迷執ノ甚シキニ抱腹セン」と結んでいる。ここでは儒学を学んだ人びとを意識し、彼らのプライドを重視しつつ認識を変化させようと、ルビを変化させたことも考えられる。

さらに七編の序からは、翻訳刊行を進める間に起った、経済書をめぐる次のような変化が知れる。熱狂的ともいえる支持を得ていたウェーランドの書物も、多くの経済書が輸入され、西洋思想の受容が進むと、「学校少年ノ読本」に過ぎないことがわかり「世ノ士君子」には顧みられなくなった。また同時に、経済と道徳が相補翼する

という説も疑われるようになってきた。

しかし小幡は、同書が「初学ノ階梯」となすべき書であることは確かであり、「初学ノ人」に示して「経済ノ端緒」、経済学入門書としての価値はあると判断していた。七編を出した明治一〇年といえば、士族反乱の時期である。士族たちが閉塞感を味わう中で、封建体制の呪縛から離れ自立する道を得るためには、形成されつつある資本主義社会の基礎を理解することが必須であると考えていた。彼はたとえ「学校少年ノ読本」であったとしても、「初学ノ人」向けの経済書としての需要を感じ、継続して出版を続けたと推察される。

『上木自由之論』　小幡篤二（次）郎訳　明治六年一一月　小幡氏版

「序」　明治六年十月　訳者記

まず、学者が是非得失を論ずるとき、是か非か得か失か自体が異なる場合と、結論は一致していても「所以ノ理」が異なる場合がある、という。出版の自由に関する意見を見ると、まだ「所以ノ理」の議論が尽くされていない。出版の自由によって、政府の忌諱に触れるものが出てくるのではないか、官員を誹謗する弊を招くのではないかといった「陳腐鎖末ノ喋論」に忙しく、「出版自由ノ趣意」を誤解して、かえって偽版を許そうとする愚論までである。古来日本では出版の事を論ずる者がなく、著作もないので、学者はまだ「事ノ重大」さがわかっていない。出版はただ「政府私有ノ器械」ではなく、「民情風俗」に関係して力を及ぼす事最も広く、「全国ノ盛衰」もこの一事よって卜（ぼく）すべきものである、と主張する。最後にこの本は、トクヴィルの『アメリカの民主主義』*Democracy in America* から「出版自由ノ一段」を抄訳したものであるとしている。

明治八年五月発行の『民間雑誌』第一一編に掲載された小幡の論説「嫡子ニ限リ家督相続ヲ為スノ弊ヲ論ス」

も、トクヴィルの『アメリカの民主主義』を下書きにして、議論を展開している。小幡は『英氏経済論』の翻訳を行いながらも、ウェーランドに代わり日本の近代形成に指針を与えるものとして、トクヴィルの『アメリカの民主主義』を読み進め、展開される議論の応用を計っていった。

住田孝太郎氏は、『上木自由之論』が福澤に与えた影響について、次のような指摘をしている。小幡の『上木自由之論』が出版されているのは、福澤が「唯政府あるのみを知って、未だ国民あらず」という表現を使い始める『学問のすゝめ』第四編の刊行（明治七年一月）以前であり、さらに知識人が政府へ集中することへの問題意識が初めて登場する同書第三編「一身独立して一国独立する事」（明治六年一二月）よりも前である。ゆえに「『学問のすゝめ』の二つの部分（第三編第四編の前掲の部分―筆者註）を貫く余りにも有名な「政府の領域と私の領域との区別」の論理は、トクヴィルによって人民主権の必然的な帰結とされる「印書ノ自由」、それが社会に波及し「法律習俗」をも変えるという『上木自由之論』の議論によって、福澤自身が人民主権に関するより深い理解に到達し得た結果登場したもの」であった可能性も考えられうるという。[67]

『弥児氏宗教三論』第壹編　小幡篤次郎訳　明治十年九月印行
『弥児氏宗教三論』第貳編　小幡篤次郎訳　明治十一年八月印行
「教用論序」　明治十一年七月廿二日小幡篤次郎記ス

J・S・ミルは、福澤諭吉も『学問のすゝめ』のなかでその影響に言及しているように、明治期に慶應義塾でもよく読まれた思想家のひとりである。福澤家に残っていた『功利主義』*Utilitarianism* や『婦人の隷従』*The Subjection of Women* には、多くの書き込みや不審紙が貼られ、福澤著作への影響については、安西敏三氏の詳細

な研究がある。[68] 小幡が『弥児氏宗教三論』を翻訳したほぼ同時期には、慶應義塾で学んだ深間内基が *The Subjection of Women* を『男女同権論』の邦題で翻訳している。[69]

『弥児氏宗教三論』*Three Essays on Religion* は、一八五〇年代にすでに完成していた二つの論文とミルが死亡する直前の一八七三年に書いた論文を、ミルの義理の娘であるヘレン・テイラーが一冊の本にまとめ、一八七四年に出版したものである。小幡が『弥児氏宗教三論』の第一編を刊行したのは明治一〇（一八七七）年九月であるから、原著刊行からわずか三年後ということになる。舩木恵子氏は「『宗教三論』がイギリスで特に評判が良かった著作ではないだけに、その日本への導入の早さは突出していることが理解できる」と述べている。[70] さらに前述のように、小幡は明治八年七月三日の三田演説会ですでに『弥児氏宗教三論』を取り上げており、また講義も行っていたことが確認できる。

第一編の序文は、ちょうど小幡がアメリカ経由でヨーロッパに行く時期に重なったため、福澤が代筆している。そこでは「第一天然論第二教用論第三大極論」の原稿ができていること、小幡は旅中校正し、帰国後第二、第三論を出版することが述べられており、また洋行の準備もあって充分な校正ができていないので、「翻訳ノ大成」は再版時であることが述べられている。しかし明治一一年八月に第二編が刊行されたあと、第三編はついに刊行されなかった。福澤の言葉通り小幡が翻訳を終えていたことは、第三編の草稿が中津市立小幡記念図書館に残されていることから判明する。しかしそれは、何らかの理由で刊行されなかった。

小泉仰氏は「第一編と第二編において、ミルが立った功利主義的宗教観の見地は、福澤の宗教論の基本的立場と一致していた」が、「超越的存在に対するミルと福澤の見解」には大きな相違があり、福澤にとっては「神の存在証明についての議論」は重要とは思われず、「霊魂の不死説」はほとんど興味をひかなかった。ゆえに第三編が

「福澤にはあまり関心を持たせたようには思われない」と推測している。[71]

舩木恵子氏は、小幡篤次郎の翻訳が「意味を把握した的確な翻訳である」と述べた上で、しかし前述のようにイギリスで出版された当時の評価とは正反対の高い評価を与えていることで、小幡が真意をどの程度理解していたかわからないとも述べている。それでも自然を恐怖心と結びつけて教育するのではなく、「正確な知識と主体的な道徳心を個人個人がもてるような教育システム」の構築を考え、哲学にも道徳性や淘冶性が存在するとの論証に同調した小幡にとって、第一編・第二編と第三編との間には、次のような差異があったと指摘する。

第一、第二論文は日本の状況に対応する現実的な道徳教育や文明開化の理念が含まれ、小幡篤次郎の持つ問題意識と共通点を持つのに対して、第三論文は小幡から見れば封建制を維持してきた儒教的対極論は当然理解できても、新しい日本の制度理念としては考えられず、まして信仰の問題は日本人にはほとんど関係ないと考えたと推測しても良いのではないだろうか。[72]

また、先に言及した大久保正健氏の見解は次のようなものである。

小幡はここで単に近代国家日本の道徳的基礎としてキリスト教は必要ないと考えていただけではない。彼は、慶應義塾の学風である実学の視点から、第一論文と第二論文の啓蒙的な意義と社会的効用を十分に計算し、第三論文における理論的なキリスト教批判、ならびに「人類教」の提唱は、近代日本における知徳の改善にはほとんど寄与しないと判断したのであろう。この取捨選択のうちに、私は、明治知識人の治者としての経世感覚を見る思いがする。[73]

三氏が指摘する通り、最もキリスト教との関係が深い部分は、日本人にとって理解することが困難であり、かつそもそもキリスト教概念が浸透していない日本の状況では、不要であると判断したとするのが、妥当であると考

える。

この著作は、第一編第二編ともに本文冒頭に「小幡篤次郎訳　桑名豊山校」と記されている。桑名豊山は中津藩上士階級で、幕末段階で藩に一二家しかない大身衆と呼ばれる家の出身である。中津藩では藩士を組分けして、大身衆がその組頭となって統治する方式をとっており、大身衆の中から年寄と称する家老が任命された。桑名家は八〇〇石取りで、豊山は天保八（一八三七）年の生まれ、一六歳で出仕し、文久三（一八六三）年から執政職として勤務した。版籍奉還後には大参事を務め、廃藩置県後は当初中津県、中津県が小倉県に併合されると小倉県の職員となった。しかし五年四月に体調不良のために職を辞し、その後一一年一一月に大分県日田郡長に任命されるまでは、公的な役職には就いていなかったようである。一一年以降は日田郡長、大分郡長、東国東郡長を歴任した。[74]

桑名豊山は、役職についていなかった間に、慶應義塾に寄宿していた時期があった。『三田評論』二四九号に掲載された田中一貞の「福澤先生中津留別の書に就て」中に、次のような記述がある。

雨山達也氏曰く「桑名豊山翁は中津藩の家老にて家老の中にては最も漢学の力ありし人、明治初年には義塾に来り三田山上の長屋に寓し居たることあり。小幡先生がドレーパー著「科学及宗教の衝突（コンフリクト、オブ、サイエンス、エンド、レリジョン）」と云う本を講ぜられしを豊山氏が自ら筆記したることあり。其筆記は今如何になりしや。年は先生と同年位にて後に郡長を勤めたることあり」[75]

雨山は小幡の講義をドレーパー著「科学及宗教の衝突」と述べているが、前述のようにミルの「宗教三論」も、ちょうど桑名が三田に滞在していたと思われる明治八年頃に講義していたと考えられるので、『宗教三論』も桑名が講義ノートを作成しており、その関係で校閲を担当したとも考えられる。

すでに三田演説会のところで述べたように、小幡は英語を解さない読者に対しても、原書と同量の情報を与えることを意図した。『宗教三論』も原書に忠実に訳しており、モンテスキューやベイコンもそのまま引用されている。しかし西洋の読者には一般的に共有される知識であっても、日本の読者には理解しがたいと思われることも多く、たとえば the powerful beings は「鬼神」、the sagacity of priests は「巫祝ノ黠智」、The Catholic religion had the resource of an infallible Church は「天主教ハ十全無過ノ羅馬教会アリテ」というように、具体的に理解できる言葉を選んでいる。その際、英学者ではない桑名の校閲は、心強い助けとなったと想像される。第三編の出版中止も福澤の意志だけではなく、小幡が、最初の読者と言える桑名の意見を参照しながら翻訳を整理し、その結果最終的に第三編の出版中止を決めたと考えられるのではないであろうか。

『議事必携　全』小幡篤次郎訳述　明治十一年八月出版

（明治十一年七月三十日版権免許　訳述出版人　小幡篤次郎）

「自序」明治十一年七月十日　訳者　誌

冒頭、政治における「会議ノ文明」は、車に輿があるようなもので、その会議に規則があることは、輿の下に輪があるようなものであるという。輿に荷物を載せても、輪がなければ動かない。日本でも元老院や地方官会議など会議が行われるようになって、「文明ノ政治学術」を運ぶには、輪がよくその役目を果せすことが大切であるという。そして原書として「英国下院ノ小書記官レジナルト、パルグレーヴ氏」の「チェーヤメン、ハンドブウク」「議長便覧ノ書」をあげている。Palgrave, Reginald Francis Douce の *The Chairman's Handbook; Suggestions and Rules for the Conduct of Chairmen of Public and Other meetings based upon the Procedure and the Prac-*

tice of Parliament である。

この書については、前述したように村上幸子氏の研究がある。村上氏によれば、福澤諭吉・小泉信吉との共著である『会議弁』が「会議に関する手ほどきの書」であるのに対し、三田演説会の経験を経て「より正確な知識を与える書物」として出版されたのが『議事必携』で、この書の特徴は「動議」について詳しく述べていることと、議長に必要な「修正」の仕方を説明していることにあるという。そしてこの書は、第一におそらく明治一〇年に欧米より持ち帰った新しい知識の紹介であり、第二に三田演説会などでの活躍からより詳しく高度な知識を提供しようと考えたもので、また第三として地方官会議の開催や自由民権運動の展開など「時代が求めていた本」であったと分析している。(76)

この書は議事の運営方法について具体的に述べたものであるため、かなり読者層が限られる。日本に議決機関としての会議を根付かせるにあたって、最初に熟語集を出版したように、手引きとなる実用書の翻訳を意図したのであろう。ただ村上氏も「時代が求めていた」と指摘しているように、議会制度が導入展開される過程で、必須の書となったと思われ、明治一七年一一月に再版されている。

（二）『民間雑誌』掲載論説

次に雑誌、新聞等に掲載された論説の中で、『民間雑誌』に掲載された「農ニ告ルノ文」「内地旅行の駁議」「支那人出稼ノ模様」を取り上げる。(77)

『民間雑誌』は、明治七年二月に創刊された。創刊号の緒言では、中央と地方との情報交換を活発にしたいと述べている。八年六月に第一二編を出して一度終刊し、同じ機能は九年九月に創刊された『家庭叢談』に引き継

がれた。一〇年四月二八日発行の第六七号からは、新聞の形態となって再び『民間雑誌』と改称され、一一年五月一九日付の第一八九号で廃刊となった。

同題（「農ニ告ルノ文」）『民間雑誌』第一編　明治七年二月[78]

小幡は初めに、世の中のなにもかもが外国人（「唐人」）風になり、いまに「日本」が外国人のものになってしまうと何事においても批判をするのは、日本を「自分ノ国」と思えばこそで、「横文字読ノ我々」でもその「心持」には「同意」すると述べたうえで、これから外国との関係をどのように構築すればよいかを説明する。

まず外見で判断することは「人見シリスル赤子」と同じであると述べ、情報についてはその「根元」を見極めることが大切だという。外国人に関する、魔法を使うとか日本の米を取りに来た、日本の牛も馬も食い尽くされるといった話は、かなり「尾ニ尾ヲ附け」た「評判」である。「事物ノ道理」がわかり「利口発明」と言われる人は、一〇中八、九、外国人好きである。

そのうえで、狐や狸は村中で一番利口な人を誑そうとせず、子どもや「少シク智恵ノ不足スル者」を狙う。外国人が悪事を働こうとする場合、日本は「最モ都合ヨキ国」である。それを防ぐには、「智恵ヲ磨」くことが重要であるという。「今ノ庄屋年寄ホト物ノ道理」が明らかであれば、誑されることはない。学ぶことは「百姓ノ仕事」に限らず、人間の一生にわたる「重宝ナル丁」で、智恵を磨けば「大敵薬ノ智恵」ができ、誑かす者にとってこれほどおそろしい「竹槍」はない。

そして、「日本人」としての意識に、次のように言及する。外国人はそもそもなぜ日本に来るのかといえば、「交易」のためである。交易による物の流入によって「田舎ノ風俗」が一変したが、外国人が米を取りに来る様

子はない。そして「日本」が外国人に取られそうになれば、（これまでのように）薩摩長州を頼みにして「他領の火事」だと見物するのではなく、「日本人」ならば「我家ノ火事」に「足腰達者ノ男ナルヲ幸ヒニ」戦うべきである。一村の危機に村中で力を合わせるように、「日本中の人気」が集まらなくては「勝利」はできない。「村ノ面目」を思うと同様に「日本ノ面目」を思わなくてはならない。

そして「日本ノ面目」を思うためには、「政府ノ所業」の良否に関心がなければならないと説く。面目を立てようとするのは「男ラシキ心」であるが、たとえばどちらが善であるかわからずに喧嘩の仲裁に飛び込めば「無分別ノ悪党」と笑われるように、まず善悪を知ることが必要で、「政府ノ所業」の良否を知ることは「一国人民ノ職掌」である。「日本人ト生タ限リ」は農民も「度外」ではない。少しの読書を心掛け、新聞紙だけでも読むようになれば、事態を理解し、そのうち「議事院」に立つ人にもなる。

そして最後に憂うべき事として、外国人との「交際ノ義理」が重なって「座舗ノ客」を「奥ノ納戸」へ通さなければならなくなることを挙げる。すなわち、内地開放の問題である。現状では、外国人は日本人より智恵と金がある。その結果武力で国を取られるのではなく、「義理ヅクノ借金」で田も山も外国人のものになってしまうことが想定される。諺に牡丹餅の食あたりには医者も薬も間に合わないというが、「日本中ノ人々」がみな智恵を磨き、牡丹餅を食べても食あたりしない覚悟ができれば、禍は転じて福となる。万病に効く薬は、智恵を磨くことしかない。「農」に告げたい全ては、学問をすることである。

この論説で小幡が主張するのは、外国との関係を引き合いに出しながら、情報は精査すること、物の道理が明らかになるよう学ぶこと、日本人としての意識を持つこと、一国人民の職掌として政治に関心を持つことである。明治五年に学制が公布されたが、『学制百年史』によれば、明治七年の就学率は男四六・二％、女一七・二％であ

った。[79] 農村部は都市部に比較して低く、『民間雑誌』が都鄙間の情報交換、格差是正を目指していたことを考えれば、小幡が創刊号でまず「農」への学問のすすめを説くことは首肯できる。

その理由づけとして外国人を取り上げ、相対的に「日本人」としての意識を強く説くことは、「智恵を磨」くと同時に、多くの人びとが主体的に政治体制の変化を受け止めていないことに対し、新たな観念を生み出そうとするものといえる。この論説の前年、明治六年は農民一揆が多発した年でもあった。農村の人びとは、新政府の諸政策に対して不満を募らせ、それが限界に及んでいた。小幡は「村ノ面目」と対比させて「日本ノ面目」を説くことで、人びとに新たな「日本」という視野を提示した。外国への疑念を基に、「日本中ノ人気」が集まらなくては、外国に勝利できないと主張したのである。「政府ノ所業」の良否を知ったうえで、「日本」を思考判断のひとつの基軸にとすることが必要であると説いた。

最後に彼は、内地開放への懸念を述べる。未だ外国人に対して日本人が智恵も金も劣っているのに、「奥ノ納戸」にまで通さねばならなくなってしまったら、国力の弱みを見せることになり、外国人は正当に日本を手にいれてしまう。この論説のもうひとつの主張は、国内情勢を顧みた対外関係のあり方といえる。

「内地旅行ノ駁議」『民間雑誌』第八編　明治八年二月

本稿の主旨は、西周の「内地旅行ノ利害」（明治七年一二月刊『明六雑誌』二三号）の分析であり、「其利アルヲ見テ其害アルヲ見ザルノ説」であることへの反駁である。今日の「好和開交」は「攘夷絶交ノ勢力」を養うためのもので、「攘夷絶交スルノ勢力アルノ国」でなければ「好和開交」は全うできないと主張する。

そもそも開国は、ペリーが自分と商売をしなければ殺すぞと言って来たに過ぎず、「文明」とか「開化」とかい

う「世界」にはあるまじき処置である。我国としては拒絶するのが当然だが、一戦を交えるとなれば負けてしまうので「好和開交」を選択したという、「プルユデンス　思慮アルコト」prudenceからの結論である。ゆえに内地旅行の良否も「国家ノ勢力」という「大眼目」に利があるか害があるかを考えなければならない。

自分も「兇暴拒絶」しようというのではないが、万国公法は有力なキリスト教国間にのみ有効であって、「一視同仁ノ法」のように考えるのは「腐洋学者」である。偏重偏軽はつきもので、「パワイズライト即チ威力ガ権利トナル」という諺を忘れてはいけない。つまりは、勢力を養うということは「以テ交ハル可ク以テ絶ツ可キノ地位」にあり、絶つにも暴力的ではなく、交わるにも卑怯ではない、対等な「躍如」たる交際を保つ力を持つことである。

ではその地位に進むために必要なものは何か。それは兵力ではなく、「綱」である。人心を維持する「綱」が多く、また人びとがよくその「綱」を認める智識を持ち、かつ「綱」を保存する徳行がなければ為しがたい。そして「綱」の具体的な説明として、「昔物語」を共にする綱、「一政府」を仰ぐ「綱」、「言語」「風俗習慣」「墳墓ノ地」を同じくする「綱」、「祖先功労」を共にする「綱」、「学校」を共にし「遊戯」を同じくする「綱」が存在すると述べる。どのような立場の人にとっても「コンモンカウス　国自慢ノ種トナルモノ」common causeが「千種万類重積」すれば、「人心」を「維持」し「国体」を「団結」する具となる。この具が国内に重積し人心が内に傾けば、「国基」はじめて立ち、「人心」はじめて結び、たとえ兵力が強くなくとも「内乱外患」に堪え、「国派」を永世に保存することができる。これこそが「勢力ヲ養ヒ得ル」ことである。

「維新ノ際」には事務が混み合い、政令がすべて的を射た訳ではなかったため、人心に「土崩瓦解ノ勢」があり、今挽回しなければ「将来ノ禍」につながりかねない。人心を維持し、体で水火をも踏ませ、歓楽を共にする

景況となすには、政体を立憲に移し、教育を広く行き渡らせ、国財の配分を平等にし、民権を興すという四者が重要で、それが「当ヲ得ル」に至れば、国家は「元気勃焉」として興る。つまり小幡が主張するところの今日の急務は、「綱」を多くし堅固にすることにあって、「外交ノ如キ」は勢力を養うものではない。外国の公使館や領事館は、「我国人」の心を外傾させる力があり、外国人居留地の人心はすでに現在「瓦解土崩ノ勢」がある。内地旅行はさらに「人心ヲ外傾スルノ具」を増やすことになる。

西周が主張する弊害除去の七か条については、すでに「社友福澤君ノ駁議」が出ているが、「財アリ力アリ智アル人」と「財ナク力ナク智ナキノ人」と親炙させれば、いかなる結果になるかは想像に易い。外国人からひどい扱いを受けても、「怯弱卑屈ノ人民」にはこれに対する気力がなく、泣き寝入りをすることになる。人情風俗を異にする外国人の「徘徊」は、人々に「懸隔及ブ可ラザルノ嘆」を生み、国綱が施廃し元気が挫傷し、人心が去って戻って来なくなる。すなわち内地旅行は「国ノ勢力」を養うものではなく、挫傷させる弊があるもので、「好和開交」も内実は勢力を養うためのものであったことを考えれば、内地旅行は今日許されるものではない。

この論説については、『文明論之概略』において福澤が「社友、小幡君の著述、民間雑誌第八編に云へることあり」として紹介している。丸山真男氏は、『民間雑誌』と『文明論之概略』とを比較したうえで「小幡の文章は福澤・小幡の実質上の合作であり、しかもこの「合作」の発起人は福澤であった、と思われる」と述べ、おそらく福澤も小幡も、在留外国人の行動に対する怒りや内地雑居尚早論では実質的に一致していたが、福澤は『明六雑誌』や『民間雑誌』において一般的な形で議論を展開し、小幡は「これを受けてヨリ直接的に例示したり、エモーショナルな調子でこれに応ずるという、一種の「リレー」についての暗黙の合意があったと推測される」としている。(80)

第八編と記されている以上、福澤が参照しているのは「内地旅行ノ駁議」であるが、小幡は、前述のように明治七年二月の第一編において、すでに内地開放の危険性に警鐘を鳴らしていた。西周の主張とそれに対する福澤の反論を通して、小幡のなかに内地旅行について関心が生まれたのではなく、そもそも小幡のなかに、明治改元後の日本をどう変えていくかという課題と結びついて、内地開放への関心があった。小幡は窮理学などの自然科学や、経済学などの人文科学を講義し翻訳刊行することで、より多くの人が西洋の書物に接し、思想的に受容する機会を作っていたが、まだ諸外国と対峙するだけの力がないと理解していた。小幡が主張するところの「綱」、すなわち共有の歴史認識の重要性、政治上の統一国家体制に止まらず、文化的な言語・風俗習慣の一致、民族性の同化、教育の均等化を強めることが優先事項であった。この論説の要点は、内地旅行の時期尚早を説くものであるが、「六百年来」の封建制度の変革によって、人心が「土崩瓦解ノ勢」「瓦解土崩ノ勢」にある中で、日本人としての「綱」、日本人としての自己意識の育成が急務であることを主張するものでもあったといえる。

平石直昭氏は、「福澤諭吉の戦略構想―『文明論之概略』期までを中心に―」『社会科学研究』第五一巻一号（一九九九年）のなかで、福澤が小幡の「内地旅行の駁議」から独立維持の緊急性を認識するに至り、封建的名分論に対する一辺倒な批判から、「君臣の義」「先祖の由緒」といった伝統的なモラルタイを戦術的に利用するようになったことを指摘している。

「支那人出稼ノ模様」『民間雑誌』一〇五　明治十一年一月一〇日

明治一〇年、小幡はアメリカおよびイギリス、フランスを訪れた。帰国後、一一年一月四日付『民間雑誌』一〇三号雑報欄に帰朝挨拶を寄せ、また一〇四号からに欧行日記を連載している。[81] 小幡は五月二三日に東京を出発

して横浜から船に乗り、まずアメリカに渡って、ニューヨーク州ニューブラウンズウィックにある、留学中に客死した弟甚三郎の墓に参った。その後イギリスに向かい、七月一八日にイギリスに到着、一〇月三〇日まで滞在した。途中七日間パリを訪れている。前掲帰朝挨拶によれば、当初はロンドンに一年程滞留の積りであったが、「帰装ヲ治メザルヲ得」なくなり、一一月一日サザンプトン港から出航したとある。おそらくは、小幡なしでは慶應義塾の運営も大変で、帰国を促されたのであろう。一二月二六日の朝横浜へ到着した。

『民間雑誌』に掲載された欧行日記（一一〇号より航海日記）には、ほとんど感想のようなことは書かれておらず、地理や観光名所の説明が多い。強いて挙げれば、行きの船で「開拓使札幌農学校御雇ノ「クラアク」氏」と一緒になり、「船中ノ良友ニハ氏ヲ第一」として常に「談話対論」して鬱懐を晴らしたということや、サンフランシスコからニューヨークへ向かう汽車から見た光景が、「カルレイ」氏の経済書に書かれていたように、「生産力ノ豊饒ヲ利スルノ順序」を示していたことを記している程度である（一〇四号および一一二号）。

その中で一〇五号（明治一一年一月一〇日付）に掲載された欧行日記には、「支那人出稼ノ模様」と題し、行きの船に同乗していた中国人労働者約一四〇〇名について、次のように記している。年齢は一二、三歳以上五〇歳以下で、船内の部屋は不潔で飲食も粗末であり、天気のよい日には二、三〇〇名ずつ順番で甲板にあがるが、その姿はまるで「人ノ虫干トカ風入」とでもいうような光景である。中国人は毎年一万五、六千人が出稼ぎに出てアメリカで「賤工」として働き、六、七千人が帰る。帰国時には二、三千元も貯蓄して、帰国後事業を起こす者もいる。アメリカ滞在中は、「何等ノ辛苦」にも堪え「何等ノ侮辱」も甘受して、金以外に関心を持たず、ひたすら「貯蓄」だけを一途に志す。

小幡は、日本人も「大富有ノ域」に入りたければ、外国における「致富」しか方法はないと述べながら、この

ような「賤工」を求めて海外に行く日本人は少なくあって欲しいという。なぜならば、「欧米諸国ノ人民」は中国の「無恥蒙昧ノ賤工」をみて、「清国一般ノ士君子」をも「蔑視」しているからである。人びとが自らが裕福になることだけを考えてしまえば、一部の人間は富者になることができても、他国から侮りを受けることになる。日本の国力を考えれば外貨に頼るしかないが、金と引き換えにうける侮辱は個人に止まらない。欧米を見聞した彼の実感は、国として侮辱を受けないためには、個々人に国民としての自覚が必要であるということであった。

第三章　交詢社設立ごろまでの思想と活動

1、新たな思惟体系の形成

第二章では、明治一三年の交詢社設立頃までに、慶應義塾内外で行った活動や発表した言説を検討した。第三章ではそこから、彼が明治という新しい時代を迎えて、いかなる変革が必須であると考えたのか、いかなる社会をめざしたのかについて考察する。

まず彼が目標としたのは、人びとのなかに新たな思惟体系を形成し、確立することであった。明治三年閏一〇月二三日付山口良蔵宛書簡で、いよいよ「我党之議論」も賛否が論じられるようになり「愉快之時」になったと述べたように、明治初年からは教育現場に洋学が根付き始め、各藩の藩校でも積極的に洋学が取り入れられていった。慶應義塾と関係が深い藩としては、中津以外でも長岡藩、福山藩、岡山藩などがあげられる。[82] 和歌山藩も前掲の山口宛書簡では分が悪く書かれてはいるが、洋学所を設置し、慶應義塾でも多くの入塾生を迎え、慶應義塾内には和歌山藩が出資した塾舎（紀州塾）も設けられた。そのような時代背景の中で、小幡は幅広い読者を対象に多くの著作を著し、また慶應義塾以外においても、中津市学校や東京師範学校中学師範科で学務を執った。

新たな思惟体系確立のために、彼が第一に目指したことは、科学的な思考の普及であった。自然科学に関する著作は、『天変地異』に代表されるように多くの読者を得た。また『博物新編補遺』のような、年少者向けの著作も著している。経済学に関する著作でも、すでに述べたように、明治四年からの一〇年までの『英氏経済論』翻訳作業の間に、入門的な経済書を取り巻く状況は変化したが、それでも小幡は都鄙の格差等を考慮し、「初学ノ人」に示して「経済ノ端緒」となすために、翻訳出版を続けた。

植木枝盛は、明治初期から一一年ごろまでの「閲読書日記」および「購賕書日記」を残している。それによれば、明治二、三年から五、六年に至るまでに読んだ本の中に『天変地異』、明治六年では『博物新編補遺』、八年では『民間雑誌』『会議弁』『上木自由之論』『三田演説筆記』、九年『英氏経済論』一～六『生産道案内』『上木自由之論』、一一年『議事必携』が挙げられている。また後者には、小幡の『生産道案内』『上木自由之論』『西洋各国銭穀出納表』（以上明治九年）『会議弁』『弥爾氏宗教三論』（同明治一〇年）『英氏経済論』七、八、九『議事必携』（同明治一一年）を見出すことができる。[83] これによれば彼が『英氏経済論』を手にしているのは、九年から一一年にかけてであり、小幡の活動成果の一端を見ることが出来よう。

小幡は前述のように、中津市学校では訳書によって学ぶことも推奨し、三田演説会での演説方針も、原書に忠実でありながらも平易な言葉で「平常ノ談話」のように語ることを理想とした。「同題」（農二告ルノ文）では、学問の重要性、特に科学的思考の重要性を説き、情報源を見極め、むやみに怖れることや毛嫌いすべきではないことを告げている。彼は新しい学問は、明治以降新たな社会を作っていくための活路となると考えた。

次に彼が重要視したのは、新たな思惟体系にひとつの基軸として日本を据えることである。彼は自らも意識すると同時に、人びとにも日本、日本国民という視野を持つべきことを説いた。

幕末から新政府樹立までの間に、小幡の中で幕府や藩に対する意識がどのように変化したのか。この点については、福澤であってもまだ充分に議論されてはいないといえる。福澤は、慶応二年二月六日付の中津藩の重臣島津祐太郎に宛てた書簡では、自らの意見を主張し下より上を凌ごうとするのは「国法を恐れざるの悪風」と述べ、同年一一月七日付で福澤英之助に宛てた書簡では、当時盛んに議論されていた大名同盟論は「大名同士のカジリヤイ」になり、それでは「我国之文明開化」は進まないと考えている。[84] またイギリスに留学した英之助に宛てては、外国で暮らしていると「フリー」を望みたくなるが、日本には「日本之風俗」があり、禍が父兄に及ぶことも考えて行動すべきことを説いている。この時点の福澤は「王制復古」に懐疑的で、薩土の議論は「私意」から出たものであるから行われるとは考えられず、しかし御家門御譜代の面々に実力はない、と分析している。[85] しかし、明治二年四月一七日付で藤本元岱に宛てた書簡では、版籍奉還に従わざるを得ないと記し、人びとが才徳に応じ独立不羈の生計を立てるべきことを述べるに至る。[86]

小幡も藩に対し福澤同様、あるいは上士階級の出身であったために、より強い帰属意識があったと想像できる。だが前述のように明治四年七月二〇日付山口良蔵宛書簡では、廃藩置県に高い評価を与え、六百年来の封建体制を崩す今度の改革は「千八百年代之美談」であり、外国から「アジヤチックのエンゲランド」という評価も得られると述べている。「日本」への意識の転換は、先に取り上げた家禄に対する議論にも表れている。家禄を「プロパーチー」と捉えるか「サラリー」と捉えるかの結論として「サラリー」に至ったのは、小幡らの政治体制に対する認識を反映している。

無論「日本」への意識はもっと以前から存在すると推測されるが、実体として日本を意識し論ずるのは、明治初年と思われる。たとえば明治二年に刊行した『西洋各国銭穀出納表』の序文で、彼は国の強弱は国の貧富に由

来するとしたうえで、富の所在が政府であるべきか、国民であるべきかを論議している。『民間雑誌』おける二つの論説「同題（農ニ告ルノ文）」「内地旅行の駁議」では、人びとに対して「日本」を意識することを求め、日本国民として外国に対応すべきことを説いている。彼は後進国としての日本が、対等な外交を行い独立を維持するためには、「綱」の存在と強化が必須であると考えた。すなわち前述した共有の歴史認識、文化的な言語・風俗習慣の一致、民族性の同化、教育の均等の重要性である。そのためには、人びとがまず「日本」を自覚的に意識することが必要であった。それはアメリカ・ヨーロッパを訪れ、諸外国から後進国がどのように見られるのかを身を以て知ったことで、より具体的に認識されるようになった。

また三番目に状況的判断力、すなわち理念だけでなくその応用も重視する思惟体系への変容が意図されたと考えられる。しかし具体的には私擬憲法案、立憲改進党参加以降の小幡の政治的関心を分析し、関係する論説や貴族院議員としての活動などを検討する必要がある。また明治一一年三月三日付『民間雑誌』一二五号に掲載された、ヨーロッパにおける政治的力関係を論じた「憶測論」や、一三年に同盟会員となり翌年脱会した「興亜会」の活動等にも着目しなければならない。

2、新たなネットワークの創設

もうひとつ、小幡が新しい時代に必須であると考えたものは、旧来の封建体制下で育まれてきた組織とは異なる、新たな紐帯に基づく組織、新しい人脈を創り出すネットワークの形成であった。新たな概念による組織が文明開化推進の核になると考えたのであろう。

そのような組織の例としては、まず三田演説会が挙げられる。同会は前述のように、西洋の討論・演説技術の

導入をきっかけとして、討論・演説の稽古を行い、またその内容を通じての智徳の進歩を期するために結ばれた組織であった。松崎欣一氏は、会の規則の草稿に会合の出席者全員が署名し花押を添えたといわれていることから、それは「「学者の社中」として文字通り演説「結社」の誕生であるということの強い意思表示の結果」であり、また三田演説会に関する金銭のやりとりが、「いわば慶應義塾という身内の中の組織と個人間」でも契約が結ばれていることについて、「そこには演説結社という新しい組織体を作り出そうとする会員たちの意思が現れているとみることができるように思われる」と指摘している。[87]

また明治一一年暮には、阿部泰蔵、森下岩楠らとともに、政府統計局の杉亨二らと相談して、「製表社」を立ち上げた。この件については、翌年一月三一日付の福澤が大隈重信に宛てた書簡で大隈と小幡との面会を取り持っており、小幡も「何卒御目に掛り様々伺度義も有之」と述べていることを告げている。この書簡には「スタチスチックの仲間」として、小幡、阿部、森下以外にも猪飼麻次郎、森島修太郎、吉川泰次郎、日原昌造、伊藤詮一郎、高木怡荘、古渡資秀、須田辰次郎、四屋純三郎、高力衛門」、統計局の人として杉以外に、新井金作、呉文総の名前が挙がっている。この年、渡辺洪基、小野梓、馬屋原彰らもまた、統計に関するグループを作成しようと計画していたので、結局合同して「統計協会」を作り、一三年一一月から機関誌『統計集誌』を刊行するようになった。[88] 小幡はこうした西洋の新しい学問を受容するための、いわば学問的共同体の形成が、封建的な帰属意識や近世の塾とは異なるコミュニティを生み、またそうした仲間との協力関係が、社会の変革を促進すると考えていた。

彼は、学問的共同体をさらに拡大した情報網の形成も意図した。前述のように、それが交詢社である。明治以後、身分制度の撤廃や諸外国との交易によって、人びとをとりまく情報量は格段に増えたが、依然信憑性や迅速

性には問題があった。また都鄙の格差も大きかった。そのため、階層的かつ地域的広がりを持ち、また人びとが帰属意識を持ち、信頼を寄せられるような組織づくりが必要であると考えたのである。福澤が発会式で「信任確実の位」について述べ、『交詢雑誌』がコレスポンデンスマガジンを目指したことが、その証左となろう。[89] また交詢社の活動が、小幡が「内地旅行ノ駁議」で述べるところの「綱」の「千種万類重積」に寄与することは、明らかである。

小幡が『学問のすゝめ』に「同著」として名を連ね、『文明論之概略』では校閲者として福澤を助け、また自身の著作『宗教三論』には、前述のように漢学の素養が中津藩一ともいわれた桑名豊山を校閲者に頼んだといった経緯[90]も、単に表面的な権威づけや階層的な配慮に止まらず、学問の枠組みを超えて西洋思想を受容するための努力であり、新たな学際的広がりを目指した側面を指摘できる。

3、徳の確立

『福澤全集緒言』に、「明治元年の事と覚ゆ」として次のようなエピソードが書かれている。ある日散歩の途中に小幡が書店で見つけて塾に持ち帰った一冊の古本が、ウェーランドの「モラルサイヤンス」であった。早速手分けして二、三枚ずつ「熟読」したところ、「徳義」を論じたもので「甚だ面白」く、早速丸善に依頼して六〇部ほど購入して、「モラルサイヤンス」の訳語についても討議を重ねて「修身論」と決定し、塾の教場に用いたとある。[91] 明治二年八月版の『芝新銭座慶應義塾之記』付録の日課表によれば、週二日福澤は「ウエーランド氏修心（ママ）論」を講義しており、また明治三年一月二二日付旧三田藩主九鬼隆義に宛てた書簡では、「（ウェーランドの経済論修身論は）其佳境ニ至てハ殆ンと眠食を忘れ候程面白きもの」と述べている。[92] モラルサイエンスは、

明治初頭に福澤や小幡の心をとらえた議論であった。

そもそも小幡の中に、モラルサイエンスへの関心があったからこそ、彼は購入を思い立ったのであろう。明治初年という時期を考えると、封建体制の瓦解のなかで、最も自らの存在意義を問われなければならなかったのは武士層であり、特に譜代一〇万石の藩の上士階級の武士の家に生まれた小幡にとって、武士が拠って立つべき行動規範を新たに模索しなければならないと考えていたのは、当然の帰結であったといえる。

そしてその関心は、J・S・ミルの『宗教三論』の翻訳へと継続する。前述のように、小幡はイギリスでの刊行の数か月後には入手したと考えられ、翌年の七月にはすでに演説で取り上げている。彼はReligion of Humanityを「人道宗」と訳し、「宗教外」に「人道」を立てることについて、ミルがもう少し長生きをしたら、ギリシャの古代の例のみならず「漢土孔孟ノ教我武士道」の如く「宗教外ニ大振シ世ヲ化シ人ヲ動スノ教」のあることを知って、より確信を強めたであろうと述べている。小幡自身も含め人びとにとって必要であると考えた、自らの拠って立つところが「人道宗」であった。しかし「漢土孔孟ノ教我武士道」すなわち儒教や武士道が「人道宗」にあたり、世を化し人を動かす力があると評価するのであれば、ミルの「人道宗」について論じる必要がなく、新たに創り出す必要もない。小幡は封建体制崩壊後、西洋文明と対峙しなければならない時にあたって、儒教や武士道は有効な「人道宗」ではないと考えたといえる。

小幡は、「人道宗」は時代とともに変化すると考え、また新たな「人道宗」は西洋からの思想に基づかなければならないと考えた。但し、宗教であるキリスト教的背景はできうる限り排除し、自然科学を理解する科学的な思考を基盤に据えたいと考えたと推測できる。それが第一編、第二編の刊行と、第三編の未刊行という結果を生んだ。彼は西洋の科学的思考を取り入れたうえで、儒教や「武士道」に代わるような新たな「宗教外」の「人道」

を、精神的支柱として模索したといえる。日本の文明国としての存在を確固たるものにするためには、智にとどまらず新たな徳の確立が重要であると考えたのである。

おわりに

小幡が新しい時代に求めたものは、人びとが封建体制の崩壊を乗り越え、新しい思惟体系を築くことであり、また知識や情報を媒介とした新たな共同体、ネットワークを築くことであり、さらにそれが徳を以て維持されていくことであった。彼が意図していたのは、人びとが主体となる社会の創出であったと考えられる。

小幡に、彼のなかの封建的な意識を越える最初の契機を与えたのは、まぎれもなく福澤諭吉であった。その福澤の明治初期の活動を見ると、それは彼の生涯にわたる事業の基礎をなすものだったといえる。そして『学問のすゝめ』が「中津留別之書」や「中津市学校之記」によって成り立っていることに象徴されるように、「中津」の存在がなくては、初期の彼の活動はあり得なかった。

前述のように、幕末期には大名同盟論を否定し、新政府に対し懐疑心を抱き、慎重論を述べていた福澤は、明治二年になると、「一身独立」「一家独立」「一国独立」という明確な近代社会像を提示する。そして福澤が自らの構想を具体化する過程で中津藩の存在は大きな役割を担った。表高一〇万石という規模であり、譜代という保守性と、一方で歴代藩主に蘭学に理解を示した藩主を擁し、幕末期も賢侯と称され中央政局との関わりが深かった伊達宗城の息子を藩主に迎えた中津藩は、彼の考えを具現化する良好な実践の地となった。その際、中津市学校にしても、士族授産にしても前面に出て活動するのは、小幡篤次郎であった。小幡の人脈の信頼関係が、大きな役割を果したといえる。

小幡が福澤に協力したのは、福澤の関心事が彼の関心事でもあったからである。人びと、特に儒教的思考が身体化されているような人びとが、いかに新しい西洋思想を受容し、自らの中に新たな思惟体系や規範を構築するか。それは彼自身にとっても、大きくかつ重要な課題であった。彼は、英文の原書によって直接的に西洋思想を受容することはできなくても、訳書によるなら、あるいは演説によるなら西洋思想を理解でき得る人びとにも目を向け、彼らが知識層として社会形成を担う契機を創出しようと努力した。そこに日本の近代化に彼が担った役割も示されていると考えられる。

本稿で検討を行ったのは、明治一三年の交詢社設立ごろまでであるから、まだ彼が負った役割について結論づけることはできない。特に後半生の彼の論説や行動は、まだ論じられていない部分も多い。今後は網羅的に取り上げていくことによって、それらに内包される意図がより明らかになるであろう。彼への理解は、明治維新が人びとの現実に対し、どのような変化をもたらそうとしていたのか、ひとつには、後世から見ればリーダーシップを見ることができないが、同時代においては大きな役割を担っていると目されている、小幡のような存在に着目することで、日本の近代化の一側面を明らかにできる。他方彼の活動を通じて、限られた知識層ではない、しかし社会を支える人びとが、どのように変化しようとしていたのかを探ることができる。それは日本の近代化の本質をとらえるための、一つの指標となろう。

（1）慶應義塾福澤研究センター所蔵。慶應義塾・神奈川県立歴史博物館編『福澤諭吉と神奈川　すべては横浜にはじまる』（二〇〇九年）六五頁にも収録されているが、図柄は少し異なる。

（2）『福澤全集緒言』『福澤諭吉著作集』（全一二巻、慶應義塾大学出版会、二〇〇二～三年、以下『著作集』と略す）第一二巻、四六〇頁。

(3)『今田見信著作集Ⅱ　小幡英之助先生』、一九七三年、医歯薬出版。『小幡英之助先生　没後100年　顕彰　歯科祭記念誌』、二〇〇九年、社団法人大分県歯科医師会・中津歯科医師会

(4)拙稿「小幡篤次郎略年譜」小幡篤次郎没後百年特集『近代日本研究』二一、二〇〇五年三月刊行、慶應義塾福澤研究センター。また歿後『時事新報』に、五月一四日から二九日まで一〇回にわたり「小幡先生逸話」が連載された。

(5)河北展生「中津藩縁辺事件に関する二三の資料」『史学』五二巻一号、一九八二年

(6)文久二年四月一一日付島津祐太郎宛書簡。『福澤諭吉書簡集』（全九巻、岩波書店、二〇〇一～二〇〇三年、以下『書簡集』と略す）第一巻、一四頁

(7)前掲『慶應義塾五十年史』、二八七頁

(8)『福澤諭吉全集』（全二一巻および別巻、一九六九～一九七一年、岩波書店、以下『全集』と略す）第二一巻、二九〇頁

(9)「小幡先生逸話（十）」一九〇五年五月二九日付『時事新報』

(10)八一～八二、八四～八五、四〇～四三頁。

(11)『交詢社百年史』交詢社、一九八三年、三二五頁

(12)近代語学会「近代語研究」編集委員会編『近代語研究　第四集』武蔵野書院、一九七四年。「小幡篤次郎と『議事必携』」『福澤手帖』九〇、福澤諭吉協会、一九九六年。「翻訳史のなかの経済書」慶應義塾大学編『文明のサイエンス―人文・社会科学と古典的教養』、慶應義塾大学出版会、二〇一一年。松田宏一郎『擬制の論理　自由の不安』慶應義塾大学出版会、二〇一六年

(13)『慶應義塾百年史』（全五巻・付録一巻、慶應義塾、一九五八～一九六九年、以下『百年史』と略す）上巻、二八五頁

(14)「義塾懐旧談」『三田評論』二五〇号、五五頁。『百年史』上巻、二二七頁。「義塾懐旧談」『三田評論』二三三号、四一頁。「余の在塾中に於ける珍談奇聞」『三田評論』二二三号、六頁

(15)慶應義塾福澤研究センター資料（2）『慶應義塾社中之約束』（解題・解説　佐志伝）、一九八六年、二〇六、二一三～二一四頁

(16)『三田評論』二三五号、五二頁。『百年史』上巻、五六三頁

(17)前出。四五八～四五九頁

(18) 履歴は、西川俊作「山口良蔵覚書」（『福澤諭吉年鑑』二七、福澤諭吉協会、二〇〇〇年）に詳しい。
(19) 『書簡集』第一巻、九〇頁
(20) 前掲西川「山口良蔵覚書」、三二頁
(21) 『書簡集』第一巻、一九七～一九八頁
(22) 同右一四五頁。『著作集』第一〇巻、二頁
(23) 『著作集』第一二巻、三三四～三三八頁
(24) 二〇一六年度日本史研究会大会近現代部会（一〇月九日）
(25) 『慶應義塾史事典』慶應義塾、二〇〇八年、七八九頁
(26) 『書簡集』第一巻、五七～五八頁
(27) 明治二年四月一七日付藤本元岱宛書簡。同右一二八頁
(28) 『著作集』第一〇巻、八頁
(29) 前掲拙稿「中津市学校に関する考察」、一〇五頁
(30) 前掲拙稿「中津市学校に関する考察」および慶應義塾福澤研究センター資料（9）『慶應義塾社中之約束』（影印版　解題米山光儀）、二〇〇四年
(31) 『資料が語る広池千九郎先生の歩み』、広池学園事業部、一九七三年、二七頁。
(32) 『書簡集』第二巻、一〇一頁。年度別に市学校に派遣された教職員については、前掲拙稿「中津市学校に関する考察」を参照されたい。
(33) 『書簡集』第一巻、二二四頁
(34) 『中津歴史』は上下二巻。防長史料出版社、一九七六年（初出一八九一年）、下巻、二四五頁
(35) 下巻、三〇七～三〇八頁
(36) 『書簡集』第二巻、一〇二頁
(37) 前掲拙稿「資料紹介　中津出身者宛小幡篤次郎書簡」、一二五頁
(38) 前掲『中津歴史』下　三〇九～三一〇頁。拙稿「天保義社に関わる新収福澤書翰」『近代日本研究』一三、一九九七年

(39) 慶應義塾福澤研究センター資料（4）『三田演説会資料』（編集・解説　松崎欣一）、二〇〇三年、一二三頁
(40) 『著作集』第一二巻、四八五～四八七頁
(41) 前掲「余の在塾中に於ける珍談奇聞」、一一頁
(42) 『三田演説筆記』第一号。前掲『三田演説会資料』七八～七九頁
(43) ①および②の一部は、前掲『三田演説会資料』に収録されている。
(44) 「三田演説第百回の記」『全集』第四巻、四七六～四八〇頁
(45) 「下手と自慢」『慶應義塾学報』二三、一九〇〇年、四六～四七頁
(46) 『植木枝盛集』第七巻、岩波書店、一九九〇年、六六、六八、七三頁
(47) 前掲住田「小幡篤次郎の思想像」、六一～六四頁
(48) 前掲松崎、九八～一〇〇頁
(49) 前掲『植木枝盛集』第七巻、一一二頁
(50) 前掲『三田演説会資料』、一五頁
(51) 同右一五頁
(52) 『書簡集』第二巻、二二八頁
(53) 同右二四二、二五一頁
(54) 『交詢社百年史』、交詢社、一九八三年、一五～一七頁ほか。
(55) 同右五五頁
(56) 『慶應義塾紀事』（慶應義塾、一八八三年）所載の「慶應義塾入社生徒年表」によれば、明治四年ごろまでは士族がほぼ一〇〇％を占め、五年八七％、六年八一％、七年七〇％と減り、一〇年は西南戦争の影響もあってかほぼ半数になった。その後一時的にすこし増え、一二年には六七％になったが、一三年以降はほぼ半々である。
(57) 前掲『三田演説会資料』、六七頁
(58) 前掲『交詢社百年史』、七七～八六頁
(59) 矢野文雄『大隈侯昔日譚』『大分県先哲叢書　矢野龍溪資料集』第七巻、大分県立先哲史料館、一九九六年、四五〇～四五一

頁

(60) 『交詢雑誌』三七、一八八一年二月五日発行、七～八頁

(61) 川崎勝・寺崎修「解題」『書簡集』第二巻、四一八～四一九頁

(62) 前掲住田「小幡篤次郎の思想像」、五八頁

(63) 『田舎新聞』明治一二年二月二六日付第一八〇号

(64) 『生産道案内』および『英氏経済論』の翻訳については、拙稿「近代化における小幡篤次郎の役割」『近代日本と経済学　慶應義塾の経済学者たち』（池田幸弘・小室正紀編著、慶應義塾大学出版会、二〇一五年）においても考察した。

(65) 慶應義塾福澤研究センター資料（2）『慶應義塾社中之約束』（解題・解説　佐志伝）、一九八六年、二〇六、二一三頁

(66) 藤原昭夫『フランシス・ウェーランドの社会経済思想―近代日本、福澤諭吉とウェーランド』、日本経済評論社、一九九三年、四八〇～四八二頁

(67) 前掲住田「小幡篤次郎の思想像」、六一～六四頁。また住田氏は、「嫡子ニ限リ家督相続ヲ為スノ弊ヲ論ス」は『アメリカの民主主義』第一巻第三章を基に展開していると指摘している。五一頁

(68) 安西敏三『福澤諭吉と自由主義―個人・自治・国体―』、慶應義塾大学出版会、二〇〇七年

(69) 鈴木しづ子『『男女同権論』の男　深間内基と自由民権の時代』、日本経済評論社、二〇〇七年

(70) 前掲舩木論文、六頁

(71) 小泉仰「ミルの『宗教三論』と福澤諭吉の宗教観」『近代日本研究』二、一九八六年、四五四頁

(72) 前掲舩木論文、七、一六、二三～二四頁ほか

(73) 大久保前掲書、二二一頁

(74) 山内祥二「奥平家家老桑名豊山と福澤諭吉」『研究紀要』第一五号、新城市設楽原歴史資料館、二〇一一年

(75) 八三頁。雨山も中津藩大身衆の出身である。

(76) 前掲「小幡篤次郎と『議事必携』」六～八頁

(77) 小幡が『民間雑誌』に発表した論説としては、トクヴィルを参照した明治八年五月の一一号に発表した論説「嫡子ニ限リ家督相続ヲ為スノ弊ヲ論ス」も、取り上げるべき重要な主題を含んでいるが、すでに前掲拙稿「小幡篤次郎考Ⅲ―「女工場の

開業を祝するの文」をめぐって―」（『近代日本研究』一九、二〇〇三年）で論じたため、ここでは省く。

(78) 『民間雑誌』第一編には、まず福澤諭吉の「農ニ告ルノ文」が掲載されている。そのため、小幡の題は「同題」となっている。

(79) 『学制百年史』文部省、一九七二年、一九五頁

(80) 『丸山真男集』第一四巻、岩波書店、一九九六年、二八八～二九〇頁

(81) 一〇五、一一〇、一一一、一一二、一一六、一二三号掲載。一一〇号より航海日誌。

(82) 『書簡集』第一巻、三九一～三九五頁

(83) 『植木枝盛集』第八巻、岩波書店、一九九〇年、一九三～二〇〇、二五〇～二六三頁

(84) 『書簡集』第一巻、五七、六五頁

(85) 同右八一～八二頁

(86) 同右一二七頁

(87) 前掲松崎、三八、六四頁

(88) 『福澤諭吉伝』第二巻、岩波書店、一九三二年（一九八一年四刷）、八五一頁。『書簡集』第二巻、一四九～一五一頁

(89) 注（58）

(90) 桑名豊山の漢学の素養については、前掲山内論文参照。

(91) 『著作集』第一二巻、四七六～四七七頁

(92) 前掲『慶應義塾社中之約束』、二一三頁。『書簡集』第一巻、一五七頁